

# Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究 —VP 3.7.87–89

小川 英世

## 0 問題の所在

VP 3.7.87–89 の三詩節をもって、Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) における〈目的〉 (karman) 論題は終わる。

バルトリハリによれば、意味論的には〈目的〉と呼ばれる kāraka (行為参与者) はすべて〈行為主体〉が〈行為〉を通じて得ようと望むもの (īpsita) であり、この特質が見出される kāraka はすべて A 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma<sup>1</sup> の改訂規則\*A 1.4.49 kartur īpsitaṃ karma<sup>2</sup> により術語〈目的〉が適用される<sup>3</sup>。

ところで、カーティアーヤナは、A 1.4.49 に対する第 1vārttika において、A 1.4.49 が適用できない事例を想定して次のような問題を提起する。

Vt. 1 on A 1.4.49: īpsitasya karmasaṃjñāyāṃ nirvṛttasya kārakatve karmasaṃjñāprasaṅgaḥ kriyepsitatvāt //

「得ようと望まれるものが〈目的〉と呼ばれるならば、〈すでに実現しているもの〉 (nirvṛtta) が kāraka である場合、それに対する術語〈目的〉の適用は結果しない。なぜなら、〈行為〉が [〈行為主体〉によって] 得ようと望まれるからである」<sup>4</sup>

パタンジャリによれば、以下の事例が該当する。

[1] *guḍaṃ bhakṣayati* (「彼は糖蜜 (guḍa) を食べる」)

第 1vārttika によれば、糖蜜に術語〈目的〉は適用できない。なぜなら、[1] における当該の糖蜜は、〈行為主体〉が飲食という〈行為〉を通じて得ようと望むものではないからである。[1] においては、〈行為主体〉が得ようと望むものは飲食という〈行為〉そのものである。そして〈行為〉もまた認識〈行為〉等の先在〈行為〉を通じて得ようと望まれるものであるから、糖蜜ではなく飲食〈行為〉こそが〈目的〉と呼ばれるべきである。

カーティアーヤナは続く第 2vārttika においてこの問題に対する解決法を提案する。

Vt. 2 on A 1.4.49: na vobhayepsitatvāt //

<sup>1</sup> 「〈行為主体〉が [自己が参与する] 〈行為〉を通じて最も得ようと望む (īpsitama) [kāraka は] 〈目的〉と呼ばれる」

<sup>2</sup> 「〈行為主体〉が [自己が参与する] 〈行為〉を通じて得ようと望む (īpsita) [kāraka は] 〈目的〉と呼ばれる」

<sup>3</sup> 小川 2015: 40 を見よ。

<sup>4</sup> パタンジャリの当該 vārttika に対する注解は以下のとおりである。MBh on A 1.4.49 (I.333.3–4): īpsitasya karmasaṃjñāyāṃ nirvṛttasya kārakatve karmasaṃjñā na prāpnoti / guḍaṃ bhakṣayati / kiṃ kārakaṃ / kriyepsitatvāt / kriyā tasyepsitā // (「得ようと望まれるものが〈目的〉と呼ばれるならば、〈すでに実現しているもの〉が kāraka である場合、それに対する術語〈目的〉の適用は結果しない。[すなわち] *guḍaṃ bhakṣayati* において [糖蜜は〈目的〉と呼ばれないということになる]。[問] なぜか。[答] 〈行為〉が [〈行為主体〉によって] 得ようと望まれるからである。〈行為〉が彼 [〈行為主体〉によって] 得ようと望まれる」)

「否むしろこのような問題は起こらない。なぜなら、[糖蜜と飲食の] 双方が [＜行為主体＞によって] 得ようと望まれるからである」<sup>5</sup>

カーティアーヤナによれば、単なる飲食ではなく、糖蜜の飲食が得ようと望まれるとき、その糖蜜もまた得ようと望まれるものである。したがって、＜行為主体＞が得ようと望むものは、糖蜜と飲食の両者であり、糖蜜に対する術語＜目的＞の適用は正当化される。

しかしながら、糖蜜に対して A 1.4.49 が適用されるためには、糖蜜は＜行為＞主体が飲食＜行為＞を通じて得ようと望むものでなければならない。バルトリハリは、VP 3.7.45 において A 1.4.49 が規定する＜目的＞を＜実現対象＞ (nirvartya)・＜変容対象＞ (vikārya)・＜到達対象＞ (prāpya) の三種に区分した<sup>6</sup>。[1]における糖蜜も、これら三種の＜目的＞のいずれかでなければならない。バルトリハリは、VP 3.7.87 において、糖蜜を、＜行為＞に対する対象性 (viṣayatā, viṣayabhāva) という関係によって飲食＜行為＞に関係付け、飲食＜行為＞との関係を通じて得ようと望まれるもの、すなわち、第一義的な意味での＜到達対象＞であるとして術語＜目的＞の適用を正当化する。このことは、バルトリハリが＜目的＞の本質を＜行為＞に対する対象性の獲得 (kriyāviṣayāpatti) に求めていることを示す。

VP 3.7.88–89 は、＜目的＞を有する動詞語根 (dhātu) が＜目的＞をもたない動詞語根とみなされる場合を検討する。

バルトリハリは、「＜行為＞に対する対象性の獲得」という概念を導入した。ところで、パタンジャリは、＜行為＞ (kriyā) について以下の三種の概念を有している<sup>7</sup>。

1. 因果論的＜行為＞—結果の生起をもたらすハタラキ、すなわち＜生ぜしめるハタラキ＞ (bhāvanā)
2. 意味論的＜行為＞—＜生ぜしめられるもの＞ (bhāvya) としての bhāva
3. 行動論的＜行為＞—示差的活動 (pravṛtṭiviśeṣa)

このうちここで注目しなければならないのは、因果論的＜行為＞である。結果を生ぜしめるハタラキとしての＜行為＞は、結果が起こるそのハタラキの対象 (viṣaya) を期待する。この意味において、＜行為＞には＜行為＞に対して対象性を獲得するものが必ず見出される<sup>8</sup>。しかしながら、もし＜行為＞に対する対象性を獲得するものが＜目的＞であるとするならば、すべての＜行為＞は＜目的＞を有する＜行為＞ (sakarmaka) であり、＜行為＞を表示する動詞語根はすべて＜目的＞を有する動詞語根ということになる<sup>9</sup>。一般に「＜目的＞をもたない動詞語根」と考えられるものも、＜目的＞を有する＜行為＞を表示する。例えば、as (「座る」) の場合、以下の [2] と [3] は等価であるからである。

<sup>5</sup>MBh on A 1.4.49 (I.333.6–8): na vaiṣa doṣaḥ / kiṃ kāraṇam / ubhayepsitatvāt / ubhayaṃ hi tasyepsitam / ātaś cobhayaṃ yaśya hi guḍabhakṣaṇe buddhiḥ prasaktā bhavati nāsau loṣṭaṃ bhakṣayitvā kṛtī bhavati // (「否むしろこのような問題は起こらない。[問] なぜか。[答] [糖蜜と飲食の] 双方が [＜行為主体＞によって] 得ようと望まれるからである。実に [糖蜜と飲食の] 双方が彼 [＜行為主体＞] によって得ようと望まれる。そしてこのゆえに、[糖蜜と飲食の] 双方 [が得ようと望まれるものである]。なぜなら、糖蜜の飲食に知が向いている者は、土塊を食べても満足しないからである」)

<sup>6</sup>VP3.7.45: nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca prāpyaṃ ceti tridhā matam / tatrepśitatamaṃ karma carturdhānyat tu kalpitam // (「それら [一般的に kāraṇa と呼ばれるもの] のうち、[＜行為主体＞が自己の＜行為＞を通じて] 最も得ようとするものが＜目的＞ (karman) と呼ばれる。[そしてその＜目的＞は] ＜実現対象＞ (nirvartya)、＜変容対象＞ (vikārya)、＜到達対象＞ (prāpya) と呼ばれる三種に区分されると考えられる。一方、他の [＜目的＞] は四種に区分されると考えられる」) 小川 2008 を見よ。

<sup>7</sup>Ogawa 2005: 186–200 を見よ。

<sup>8</sup>Prakāśa on VP 3.7.65 (280.12–13): viṣayabhāvāpattir hi sarvasya dhātvarthasyāstīti ... / (「実にすべての動詞語根の意味に [＜行為＞に対する] 対象性の獲得が見出される」) 小川 2011: 53 を見よ。

<sup>9</sup>VP 3.7.87.11 を見よ。

[2] *āste* (「彼は座る」)

[3] *āsanam karoti* (「彼は座<行為>をなしている」)

動詞語根 *ās* に、その意味として座<行為>と座<行為>の実現という結果を生ぜしめるハタラキを想定するならば、この動詞語根は<目的>を有する<行為>を表示すると言える。座<行為>は<生ぜしめるハタラキ>の対象である。意味論的には動詞語根はすべて<目的>を有する<行為>を表示する。

ここに動詞語根を<目的>を有する動詞語根と<目的>をもたない動詞語根 (*akarmaka*) に区別する根拠が求められる。なぜなら、文法学は、例えば A 3.4.69 *laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyaḥ* に代表されるように<sup>10</sup>、その派生手続きにおいて<目的>をもたない<行為>、<目的>をもたない動詞語根という概念に依拠するからである。<目的>論題の最終に位置する二詩節 VP 3.7.88–89 は、この「<目的>をもたない動詞語根」定立の根拠を提示する。

本稿が取り上げる三詩節は以下のとおりである。

VP 3.7.87: *yan nirvṛttāśrayam karma prāpter apracitam punaḥ /  
bhakṣyādviṣayāpattya bhidyamānam tad īpsitam //*

「<すでに実現しているもの>を拠所とする、しかし、[飲食行為との] 関係 (*prāpti*) からは [どんな特性も] 付加されない<目的> [能力] は、飲食等の [〈行為〉] に対する対象 [性] の獲得によって差異化されるから、得ようと望まれるものである」

VP 3.7.88: *dhātor arthāntare vṛtter dhātvarthenopasaṃgrahāt /  
prasiddher avivakṣātaḥ karmaṇo 'karmikā kriyā //*

「(1) 動詞語根が別の意味を表示することから、(2) <目的>が動詞語根の意味によって包含されることから、(3) <目的>の周知性から、(4) <目的>に対する表現意図のないことから、[動詞語根は] <目的>を持たない<行為> [を表示するとみなされる]」

VP 3.7.89: *bhedā ya ete catvāraḥ sāmānyena pradarśitāḥ /  
te nimittādibhedena bhidyante bahudhā punaḥ //*

「以上、[<目的>を有する動詞語根でありながら「<目的>をもたない動詞語根」と呼ばれる動詞語根を区別する] 四種の区別根拠を一般的に明示したが、それらは文法操作の根拠 (*nimitta*) 等の違いによって、さらに多様に区分される」

## 1 VP 3.7.87

すでに述べたように、VP 3.7.87 は A 1.4.49 に対する *Vārttika* を念頭に置いたものである。[1] における糖蜜をバルトリハリがどのように分析しているかが明瞭である。

### 1.1 *nirvṛttāśrayam karma*

バルトリハリは、[1] における糖蜜をまず「<すでに実現しているもの> (*nirvṛtta*) を拠所とする<目的>」(*nirvṛttāśrayam karma*) と規定する。糖蜜は<すでに実現しているもの>であるから、<実現対象>ではない。そしてその糖蜜は<目的>の基体である。すなわち、この場合「目的」という語によって<目的>能力 (*karmaśakti*) が意図されている。まずもって、<目的>能力

<sup>10</sup>この規則は、*l* 音 (動詞接辞) は<目的>を有する<行為>を表示する動詞語根 (*sakarmaka*) の後では<目的>と<行為主体>を表示し、<目的>をもたない<行為>を表示する動詞語根 (*akarmaka*) の後では<行為> (*bhāva*) と<行為主体>を表示することを規定する。

(karmaśakti) がくすでに実現しているもの>を拠所とすると言われるとき、そのくすでに実現されているもの>はその能力を保持する実体 (dravya) である。<目的>能力が得ようと望まれるもの (īpsita) であるとき、その能力の保持者である実体もまた得ようと望まれるものである。

## 1.2 prāpter apracitam

さらにバルトリハリは、[1]における糖蜜を「[飲食<行為>との] 関係 (prāpti) からは何も付加されないもの」(prāpter apracitam) と規定する。これによって糖蜜が<変容対象>であることを排除している。

カイヤタは、vt. 1 on A 1.4.49 を次のように説明している。

Pradīpa on MBh to A 1.4.49 (II.410): īpsitasyeti / īpsitatamam evepsitapadena sāmānyāśabdena nirdiṣṭam / viśeṣeṣu sāmānyasya bhāvāt / tatra yan nirvṛtṭam kriyayānādheyavikāraṃ kriyāniṣpattyartham kevalam upādīyate tat kriyāsambandhāt prāpyam api nepsitam iti tasya karmasamjñā na prāpnoti / yatra hi karmārthā kriyā, niṣpattiḥ saṃskāraḥ pratipattir vā tatra karmepsitam / anyatra tu kriyaiva pratiyamānasamdarśanādikriyāpekṣayepsiteti bhāvaḥ / guḍam bhakṣayatīti / bhakṣaṇāya guḍasyopādānam, na tu guḍāya bhakṣaṇānuṣṭhānam /

『得ようと望まれるもの』(īpsitasya) について。まさに最も得ようと望まれるものが、一般表示語であるīpsita (「得ようと望まれるもの」という語によって表示されている。一般は特殊に存在するからである。

その場合、<行為>によって変容 (vikāra) が付与され得ず、ただ単に<行為>の実現のためだけに使用されるくすでに実現しているもの>、それは、<行為>との関係 (kriyāsambandha) に基づき到達対象 (prāpya) であるとしても、得ようと望まれるものではない。したがって、それに術語<目的>の適用は結果しない。

実に、<行為>が<目的>に資する場合、すなわち [<目的>に] 実現 (niṣpatti)、浄化・完成 (saṃskāra)、あるいは処分 (pratipatti) がある場合、<目的>は得ようと望まれるものである<sup>11</sup>。

しかしながら、他の場合は、<行為>そのものが、現に理解される知覚をはじめとする<行為>に相関して得ようと望まれるものである<sup>12</sup>。このようなことが意図されている。

<sup>11</sup>ナーゲーシャは、カイヤタがここで述べる「実現」・「浄化・完成」・「処分」を次のように説明している。Uddyota on MBh to A 1.4.49 (III.410): niṣpattiḥ kaṭādeḥ / saṃskāraḥ prokṣaṇādinā vrīhyādeḥ / pratipattiḥ dāhādinā havirādeḥ / 「実現」・「浄化・完成」・「処分」の例文としてそれぞれ以下の文が想定される。kaṭam karoti (「彼はマットを作っている」)・vrīhīm prokṣati (「米穀に散水すべし」)・āhitāgnim agnibhir dahanti yajñapātrais ca (Śabarabhāṣya on MS 5.1.9; Śatapathabrāhmaṇa 12.5.2.1) (「祭火を保持して来た者を火と祭具とともに焼くべし」)「処分」とはこの葬送儀軌の場合、祭火を保持して来た者の身体の処分、すなわち火葬である。

<sup>12</sup><行為>もまた<行為>を通じて最も得ようと望まれるものとなる。ここでカイヤタが念頭に置いているのは、パタンジャリの次の言明とそれに基づくバルトリハリの VP 3.7.16–17 における主張点である。MBh ad A 1.4.32: kriyāpi kriyayepsitatamā bhavati / kayā kriyayā / sandarśanakriyayā vā prārthayatikriyayā vā adhyavasyatikriyayā vā / iha ya eṣa manuṣyaḥ prekṣāpūrvakārī bhavati sa buddhyā tāvat kaṃcid artham sampaśyati samdrṣṭe prārthanā prārthanāyām adhyavasāyaḥ adhyavasāya ārambhaḥ ārambhe nirvṛtṭiḥ nirvṛttau phalāvāptiḥ / evam kriyāpi krtrimaṃ karma / (「<行為>もまた<行為>を通じて最も得ようと望まれるものとなる。[問] どのような<行為>を通じてか。[答] 知覚<行為> (sandarśanakriyā)、あるいは欲求<行為> (prārthayatikriyā)、あるいは判断<行為> (adhyavasyatikriyā) を通じてである。ここでこの思慮深いひとが先ず知によってある対象を知覚するとしよう。一度知覚されたならば、それに対する欲求が生じ、欲求が起こったならば、判断が生ずる。判断した後、[<行為>に] 着手 (ārambha) する。着手したならば、[それは] 完了 (nirvṛtti) する。完了したならば、[<行為>の] 結果が獲得 (phalāvāpti) される。このように<行為>もまた [A 1.4.49 の<目的>定義に従う] 専門的な意味での<目的>である」)

VP 3.7.16–17: samdarśanam prārthanāyām vyavasāye tv anantarā / vyavasāyas tathārambhe sādhanatvāya kalpate // pūrvasmin yā kriyā saiva parasmin sādhanam matā / samdarśane tu caitanyam viśiṣṭam sādhanam viduḥ //

*guḍaṃ bhakṣayati* について。飲食のために糖蜜が使用される。しかし、糖蜜のために飲食が遂行されるのではない」

カイヤタによれば、vt. 1 の見解では、当該の糖蜜は、〈すでに実現しているもの〉であり、〈行為〉によって変容 (vikāra) が付与されないものであり、ただ単に〈行為〉の実現のためだけに使用されるものである。そしてそれは、〈行為〉との関係 (kriyāsambandha) が成立している点で〈到達対象〉 (prāpya) である。しかし、それは得ようと望まれるものではない。得ようと望まれるものは飲食〈行為〉である<sup>13</sup>。

一方、ヘーラーラージャによれば、[1] における糖蜜は、飲食〈行為〉との関係に基づいて、増減のいずれの特性 (viśeṣa) と結びつかず、どんな特性も付加されることがないものとして〈到達対象〉ですらない<sup>14</sup>。しかしこの解釈は、バルトリハリが糖蜜を〈到達対象〉と認めていることと矛盾する。

カイヤタが「〈行為〉によって変容 (vikāra) が付与され得ず」と述べていることが、バルトリハリが *prāpter apracitam* によって意図していることであると考えるのが妥当であろう。すなわち、バルトリハリは当該の表現によって [1] の糖蜜を〈変容対象〉ではないものと規定しているのである。

### 1.3 bhakṣyādīviṣayāpattyā bhidyamānaṃ tad īpsitaṃ

カイヤタは第 2vārttika を次のように説明する。

Pradīpa on MBh to A 1.4.49 (II.410): na veti / guḍabhakṣaṇaṃ yasyepsitaṃ tasya guḍo bhakṣaṇa-kriyayepsitaḥ / yasmān nāsau guḍasya darśanaśparśanādīnā kṛtī bhavati, nāpi loṣṭādibhakṣaṇeneti na bhakṣaṇamātram īpsitaṃ nāpi guḍamātram ity arthaḥ /

『否むしろこのような問題は起こらない』について。糖蜜の飲食を得ようと望む者は糖蜜を飲食〈行為〉を通じて得ようと望む。なぜなら、彼は、糖蜜を見たり糖蜜に触ったりなどすることによっては満足せず、土塊等を食すことによって満足しないから、[彼は] 飲食だけを得ようと望むこともなく、糖蜜だけを得ようと望むこともない。このような意味である」

カイヤタによれば、[1] における糖蜜は〈行為主体〉により飲食〈行為〉を通じて得ようと望まれるものである。カイヤタは糖蜜を〈到達対象〉として正当化している。

バルトリハリによれば、[1] における糖蜜は飲食〈行為〉に対する対象性を獲得している。すなわち、当該の糖蜜は飲食〈行為〉の対象となっている。バルトリハリは、VP 3.7.51 において〈到達対象〉を定義し、〈到達対象〉を〈行為〉によってもたらされた特性がそれにおいて認識されないもの、〈行為主体〉が〈行為〉を通じて単に対象性だけによって最も得ようと望むものとする<sup>15</sup>。〈行為〉の対象であるということは、〈行為〉と関係することであるから、この〈行為〉

(「知覚行為は欲求行為に相関して〈能成者〉となり、一方決断行為に対してはその直前にあるもの [すなわち欲求行為が]、さらに決断行為は着手行為に相関して〈能成者〉となる。[このように] 先行要素に相関して [〈実現対象〉と見なされる] 同じ〈行為〉が後続要素に相関して〈能成者〉とみなされる。しかしながら、知覚行為に相関しては、限定された精神性 (caitanya) が〈能成者〉であると言われる」) 小川 2000: 551–52 を見よ。

<sup>13</sup>バルトリハリは当該詩節において *prāpti* (「到達」) という語を使用している。カイヤタもヘーラーラージャもそれを「関係」(sambandha) を意味するものと解している。因みに、バルトリハリによる *prāpti* の「関係」の意味での使用が「関係」詳解章の二詩節において見られる (VP 3.3.8; 19)。

<sup>14</sup>VP 3.7.87.2 を見よ。

<sup>15</sup>VP 3.7.51.3 を見よ。

との関係以外に、〈行為〉によってもたらされる特性が見出されないもの、それが〈到達対象〉である。したがって、バルトリハリによれば当該の糖蜜は〈到達対象〉である。

[1]における問題は、vt. 1の見地からは、糖蜜が対象性の条件を満たしても、望まれるという条件を満たさない点にある。〈目的〉としての〈到達対象〉は〈行為〉の対象であり、かつ、望まれるものでなければならない。バルトリハリによれば、[1]においては、糖蜜は飲食〈行為〉の対象 (viṣaya) として、飲食〈行為〉に対する対象性を獲得している (viṣayāpatti)。糖蜜が飲食〈行為〉に対するこの対象性を獲得しているとき、糖蜜と飲食〈行為〉の間には関係 (sambandha) が成立している。この関係に基づき、糖蜜は飲食〈行為〉以外の〈行為〉と関係する糖蜜から差異化するなわち排除され、飲食〈行為〉は糖蜜以外の実体と関係する飲食〈行為〉から差異化される。この場合、糖蜜と飲食〈行為〉の間には相互的な限定関係が成立する。糖蜜に限定された飲食〈行為〉が得ようと望まれる。したがって、糖蜜を得ようと望むことは飲食〈行為〉を得ようと望むことであり、飲食〈行為〉を得ようと望むことは糖蜜を得ようと望むことである。このように、当該の文における糖蜜に対する術語〈目的〉の適用が正当化される。〈行為〉の対象であるものは、〈行為〉が得ようと望まれるものであるとき、必然的に得ようと望まれるものである。

以上から明らかになることは、バルトリハリが、糖蜜と飲食〈行為〉の間の限定関係を根拠付ける限定関係の基盤的關係を説明するために「〈行為〉に対する対象性の獲得」という概念を導入し、〈行為〉に対する対象性のある種の関係概念として〈目的〉を定立する根拠としていることである<sup>16</sup>。当然、この〈行為〉に対する対象性という関係が〈行為〉との間に成立し、かつ、実現 (nirvṛtti) という〈行為〉に基づく特性が見出されるものが〈実現対象〉、変容 (vukāra) という〈行為〉に基づく特性が見出されるものが〈変容対象〉であり、この関係以外に〈行為〉に基づく特性が見出されないものが〈到達対象〉である<sup>17</sup>。

## 2 VP 3.7.88–89

すでに述べたように、〈行為〉には〈行為〉に対して対象性を獲得するものが必ず見出され、この意味で〈行為〉を表示する動詞語根はすべて〈目的〉を有する。しかしながら、一定の根拠から、動詞語根は〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる。その根拠とは、(1) 動詞語根の別の意味の表示、(2) 〈目的〉の動詞語根の意味による包含、(3) 〈目的〉の周知性、(4) 〈目的〉に対する表現意図の欠如である。これらの根拠は、さらなる文法操作の根拠である upasagra 等の要素によって、多様なものとなる。VP 3.7.88–89 はこれらのことを指摘する。

<sup>16</sup>ニヤーヤ学派のウディヨータカラ (Uddyotakara) は、ヴァーツヤヤナ (Vātsyāyana, 別名パクスラスヴァーミン Pakṣilasvāmin) の NS 2.1.16 に対する Bhāṣya における以下の言明を注釈する際に、〈行為〉に対する対象性によって〈目的〉を定義している。NBh on NS 2.1.16 (434–437): vṛkṣam paśyatīti darśanenāptum iṣyamānatamatvāt karma / (「vṛkṣam paśyati (「彼は木を見る」) においては[木 (vṛkṣa) は]知覚行為を通じて最も得ようと望まれるものであるから〈目的〉である」) NV on NBh to NS 2.1.16 (437): darśanenāptum iṣyamānatvād vṛkṣaḥ karma / karmaṇi kaḥ kārakārthaḥ / kriyāviśayatvam / yat khalu kriyāya viśayabhāvena vyavatiṣṭhate tat karma / etena karmalakṣaṇena tathāyuktaṁ cānīpsitam iti samgrhitam / (「知覚行為を通じて得ようと望まれるものであるから、木は〈目的〉である。[問] 〈目的〉に関して kāraka という [語] で意図されるものは何か。[答] 〈行為〉に対する対象性 (kriyāviśayatva) である。実に、およそ〈行為〉に対する対象として存立するものは〈目的〉である。この〈目的〉の定義は A 1.4.50 tathāyuktaṁ cānīpsitam による〈目的〉も包摂する」) 現段階でバルトリハリとの影響関係を論ずることはできない。A 1.4.50 については小川 2015 を見よ。

<sup>17</sup>この点を明確に指摘したのはジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi) である。Nyāsa on KV to A 1.4.49: prāpyam yatra vyāptivyatirekeṇa kriyākṛtā viśā na vibhāvante yathā ādityam paśyatīti / na hi dṛśikriyāya vyāpyamānasya savituḥ prāpter anyathā kriyākṛtavīṣeṣa upalabhyata iti prāpyam etat karma // (「〈到達対象〉とは、それにおいて、〈到達〉 (vyāpti) 以外に〈行為〉に基づく特性が考えられないものであり、例えば ādityam paśyati (「彼は太陽を見ている」) [における太陽] である。実に、知覚〈行為〉が到達する太陽には、〈到達〉 (prāpti) [すなわち知覚〈行為〉との関係] 以外に〈行為〉に基づく特性は認識されない。以上、これが〈到達対象〉たる〈目的〉である」)

まずもって、一般に「〈目的〉をもたない動詞語根」とは、動詞語根がその意味として〈目的〉を包含し、動詞語根の意味の外部に〈目的〉をもたない動詞語根である。しかしながら、その意味として〈目的〉を包含する動詞語根のすべてが「〈目的〉をもたない動詞語根」であるわけではない。派生動詞語根の一群のものは、内部と外部に〈目的〉を有するからである。

動詞語根の意味の外部に〈目的〉を有する動詞語根が一般に「〈目的〉を有する動詞語根」と言われるものである。この動詞語根の意味の外部に〈目的〉を有する動詞語根は、別の意味の表示、〈目的〉の周知性、〈目的〉に対する表現意図の欠如に基づいて、〈目的〉をもたない動詞語根となる。

なお、外的なく目的〉を有する動詞語根もその意味の内部に〈生ぜしめるハタラキ〉に対する内的なく目的〉を有する。この場合、内的なく目的〉は〈生ぜしめるハタラキ〉に対して〈手段〉となることをヘーラーラージャは指摘している<sup>18</sup>。

以下、ヘーラーラージャが挙げる例文を中心に考察しよう。

## 2.1 動詞語根の別の意味の表示 (arthāntaravṛtti)

バルトリハリは、外的なく目的〉を有する動詞語根が、外的なく目的〉をもたない動詞語根となる場合の根拠のひとつとして動詞語根の別の意味の表示を挙げる。ヘーラーラージャによれば、文の言明効力(さもなくば言明自体が無効になること)、動詞語根への upasarga の前接、動詞語根の ātmanepada 接辞の後続、〈目的・行為主体〉(karmakartṛ) 表現の場合が該当する。

### 2.1.1 文の言明効力 (vākyasāmarthya)

ヘーラーラージャは動詞語根 *vah* を取り上げる。*vah* は、それが使用される文に応じて外的なく目的〉を有する〈行為〉と外的なく目的〉をもたない〈行為〉のいずれをも表示する。

[1] *bhāraṃ vahati* (「彼は荷を運ぶ」)

[2] *nadī vahati* (「川が流れる」)

[3] *nadī syandanaṃ karoti* (「川が流れる〈行為〉をなしている」)

[4] *vāyur vahati* (「風が吹く」)

[1] においては、動詞語根 *vah* は運ぶ〈行為〉を表示する。運ぶ〈行為〉は動詞語根の意味の外部に〈目的〉を有する。しかしながら、[2] においては流れる〈行為〉、[4] においては吹く〈行為〉を表示する。流れる〈行為〉も吹く〈行為〉も〈目的〉をもたない。この動詞語根 *vah* の外的〈目的〉をもたない動詞語根への転換は [2]・[4] という文の言明が動詞語根の意味の転換がなければ無意味となるということを根拠とする。[4] において *vah* は流れる〈行為〉を意味することはできない。これもまた文の言明効力である<sup>19</sup>。

[2] が [3] によって換言されるように、[2] において *vah* は流れる〈行為〉を生ぜしめるハタラキを表示する。その〈生ぜしめるハタラキ〉は流れる〈行為〉を対象とする。この場合は、その流れる〈行為〉自体が内的〈目的〉である。

<sup>18</sup>VP 3.7.87.16 を見よ。

<sup>19</sup>[2]・[4] における *vah* の意味の転換は、特殊なく行為主体〉の効力 (kartṛviśeṣasāmarthya) によるものでもある。VP 3.7.89.6 を見よ。

### 2.1.2 upasarga

動詞語根 *car* が取り上げられる。*car* は、*upasarga* に先行されない場合は外的<目的>を有し、*upasarga* である *ud* に先行される場合は、*parasmaipada* 接辞が後続するとき、外的<目的>をもたない<sup>20</sup>。文法操作の根拠である *upasarga* によって外的<目的>をもたない動詞語根に転換される。

[1] *kurūṃś carati* (「彼はクル国に行く」)<sup>21</sup>

[2] *bāṣpa uccarati* (「蒸気が立ち上る」)

[3] *dhūma uccarati* (「煙が立ち上る」)

次の規則を見よ。

A 1.3.53 *udaś caraḥ sakarmakāt //*

「<目的>を有する<行為>を表示する、*upasarga* である *ud* が先行する動詞語根 *car* の後に *ātmanepada* 接辞が起こる」

この規則は以下の文における *uccarate* という語形を説明する。

[4] *geham uccarate* (「彼は家族を踏み越え行く、家族を捨てる」)

A 1.3.53 は、*ud* が先行する動詞語根 *car* には外的<目的>を有する<行為>を表示する場合とそうでない場合があることを前提としている。*ud* が先行する動詞語根 *car* が外的<目的>をもたないとき、A 1.3.78 *śeṣāt kartari parasmaipadam* により<sup>22</sup>、*parasmaipada* 接辞が起こる。それが [2] と [3] である。この場合、*ud* が先行する動詞語根 *car* は上方向への活動 (*ūrdhvavaprṛtti*) を表示する。動詞語根 *car* はそれ単独では [1] におけるように進行<行為>を表示する。

### 2.1.3 ātmanepada 接辞使用

*uccarati* と *uccarate* の対立が示すように、同一の動詞語根、同一の *upasarga* と同一の動詞語根の複合体であっても、*parasmaipada* 接辞・*ātmanepada* 接辞の使用が外的<目的>を有するか否かの基準となる。

[1] *uttapati suvarṇaṃ suvarṇakāraḥ* (「金細工人は金を融解する」)

[2] *vitapati pṛthivīm savitā* (「太陽は大地を熱する」)

[3] *uttapate* (「それが輝く」)

[4] *vitapate* (「それが輝く」)

[5] *bhāsate* (「それが輝く」)<sup>23</sup>

<sup>20</sup>*upasarga* の意味論的な機能については Ogawa 2005: 118–127 を見よ。

<sup>21</sup>MBh on A 3.2.16 (II.101.2). Pradīpa on MBh to A 3.2.16 (III.233): *kurūṃś caratīti / yasya kurava eva prāpyāḥ sa kurūṃś caratīty ucyate / Uddyota on MBh to A 3.2.16 (III.233): kurūṃś caratīti / tān gacchatīty arthaḥ /*

<sup>22</sup>A 1.3.78 は、*ātmanepada* 接辞が生起することが特定されていない動詞語根の後に、<行為主体>が表示されるべきとき、*parasmaipada* 接辞が起こることを規定する。

<sup>23</sup>*Kāśikāvṛtti* は *dīpyate* と等価とする。KV on A 1.3.27: *dīpyate iti arthaḥ /*



[1] においては *ut(d)-tap* に *parasmaipada* 接辞が後続する *uttapati* が使用されている。この場合 *ut-tap* は融解〈行為〉を表示し、外的〈目的〉を有する。しかし、*ut-tap* は、その後に *ātmanepada* 接辞が起こる *uttapate* においては、外的〈目的〉をもたない輝く〈行為〉を表示する。[3]・[4] は [5] に等価である。このことは次の規則として定式化されている。

#### A 1.3.27 *udvibhyām tapaḥ* //

「〈目的〉をもたない〈行為〉を表示する、*upasarga* である *ud・vi* が先行する動詞語根 *tap* の後に、*ātmanepada* 接辞が起こる」

*vi-tap* の場合も同様である。

*upa-sthā* の場合、この複合体は、*parasmaipada* 接辞が起こる場合には外的〈目的〉を有する接近〈行為〉を表示し、他方、*ātmanepada* 接辞が起こる場合には外的〈目的〉をもたない近侍〈行為〉を表示する。

[6] *rājānam upatiṣṭhati* (「彼は王に近づく」)

[7] *yāvadbhuktam upatiṣṭhate* (「彼は食事がなされる限り居合わせる」)

[7] を対象とする文法規則は以下のとおりである。

#### A 1.3.26 *akarmakāc ca* //

「〈目的〉をもたない〈行為〉を表示する、*upasarga* である *upa* が先行する動詞語根 *sthā* の後に *ātmanepada* 接辞が起こる」

*jñā* の場合も、*parasmaipada* 接辞の場合は外的〈目的〉を有する認識〈行為〉を表示し、*ātmanepada* 接辞の場合は、外的〈目的〉をもたない活動〈行為〉 (*pravṛtti*) を表示する。

[8] *svareṇa putram jānāti* (「彼は声で息子だとわかる」)

[9] *sarpiṣo jānīte* (「彼は酥乳を用いて活動する」)<sup>24</sup>

[10] *madhuno jānīte* (「彼は蜜を用いて活動する」)

次の規則として定式化されている。

#### A 1.3.45 *akarmakāc ca* //

「〈目的〉をもたない〈行為〉を表示する動詞語根 *jñā* の後に *ātmanepada* 接辞が起こる」

### 2.1.4 〈目的・行為主体〉 (*karmakartṛ*)

〈目的〉に関する〈行為〉の実現容易性を表現するのが〈目的・行為主体〉表現である。〈目的〉のもつ〈行為〉自体が動詞語根によって表示される。

<sup>24</sup>Kāśikāvṛtti によれば、「酥乳を手段として活動する」という意味である。KV on A 1.3.45: *sarpiṣā upāyena pravartate ity arthaḥ* / なお、*sarpiṣo* (*sarpiṣah*) は第 6 格接辞で終わる項目であり、その第 6 格接辞の導入は A 2.3.51 *jñō 'vidarthasya karaṇe* (「認識を意味しない *jñā* の手段が残余 (A 2.3.50 *śeṣe*) として表現しようと意図されるとき、第 6 格接辞が起こる」) により説明される。

- [1] *odanaṃ pacati*（「彼は粥を調理している」）  
 [2] *pacyate odanaḥ svayam eva*（「粥がまさに自ずと煮える」）  
 [3] *mokṣate (mumuṣate) vatsaḥ svayam eva*（「子牛はまさに自ずと自由になる」）  
 [4] *mumuṣati vatsaṃ devadattaḥ*（「デーヴァダッタは子牛を解放しようと望む」）<sup>25</sup>

*pac* は [1] においては軟化をもたらすハタラキ (*vikledanā*) を表示し、＜目的・行為主体＞表現である [2] においては [1] における＜目的＞のもつハタラキである軟化作用 (*viklitti*) を表示する<sup>26</sup>。また、意欲活用動詞語根 *mukṣa-/mokṣa-* (*muc-san*) は、[4] においては、＜行為主体＞であるデーヴァダッタのもつ解放しようという欲求を表示し、[3] においては、自らを解放する子牛の＜行為＞を表示する<sup>27</sup>。

[3] の関連規則は以下のものである。

A 7.4.57 *muco 'karmakasya guṇo vā //*

「*s* 音で始まる *san* 接辞が後続するとき、＜目的＞をもたない＜行為＞を表示する動詞語根 *muc* に任意に *guṇa* が代置される」

## 2.2 ＜目的＞の動詞語根の意味による包含

ヘーラーラージャは、＜目的＞の動詞語根の意味による包含が見られる場合として、包含が＜行為＞の本質の効力 (*kriyāsvarūpasāmarthya*) に基づく場合と包含が正語説明のための概念的区分 (*anvākyānavyavasthā*) に基づく場合とを挙げる。ヘーラーラージャが例として挙げるのは、前者の場合が一般に「＜目的＞をもたない動詞語根」とみなされる動詞語根であり、後者の場合が A 3.1.32 *sanādyantā dhātavaḥ* により動詞語根 (*dhātu*) と呼ばれる派生動詞語根<sup>28</sup> のうちの文法操作のために内的＜目的＞が措定される動詞語根である。

### 2.2.1 ＜行為＞の本質の効力

ヘーラーラージャは、動詞語根 *jīv·mṛ·as* を取り上げる。典型的な「＜目的＞をもたない動詞語根」である。ヘーラーラージャによれば、これらの動詞語根においては＜行為＞の＜目的＞は＜行為＞との差異が隠蔽され (*tirohitabheda*)、動詞語根の意味に包含される。したがって、その＜目的＞は外的＜目的＞として措定されない<sup>29</sup>。＜目的＞と＜行為＞の差異が隠蔽されるのは、＜目的＞によって限定された＜行為＞、＜目的＞と一体化した＜行為＞が表示対象であるからである。

<sup>25</sup>Nyāsa on KV to A 7.4.57: *mokṣate iti / muç mokṣaṇe / coḥ kuḥ iti kutvam, iṅ koḥ iti śatvam, karmavat karmaṇā ityādinā karmavadatideśād ātmanepadam / svayam eveti vacanaṃ karmakartṛtvapradarśanārtham / vatsaṃ moktum icchati, sa moktum iṣyamāṇo muktikriyāṃ praty ānukūlyam yadā pratipadyate tadā svatantratvād asmin karmaṇi kartṛtvena vivakṣite mucir akarmako bhavati //*（「彼は子牛を解放しようと望む。その子牛は解放しようと望まれているとき、解放＜行為＞に対する適性を得ている。そのとき、自主的なものとしてこの＜目的＞は＜行為主体＞として表現しようと意図される。この場合、動詞語根 *muc* は＜目的＞をもたない」）A 7.4.58 *atra lopo 'bhyāsasya* により *abhyāsa* (A 6.1.4 *pūrvo 'bhyāsaḥ*) である *mu-mukṣa-* の最初の *mu-* は任意に脱落する。

<sup>26</sup>＜目的・行為主体＞表現については、小川 2009–2011 を見よ。

<sup>27</sup>*muc-san* における接辞 *san* の導入規則は A 3.1.7 *dhātoḥ karmaṇaḥ samānakartṛkād icchāyām vā* である。この規則は、動詞語根が表示する＜行為＞が欲求＜行為＞の＜目的＞であり、かつ、これら二つの＜行為＞の＜行為主体＞が同一であるという条件で、当該の動詞語根の後に接辞 *san* が任意に起こることを規定する。

<sup>28</sup>A 3.1.32 は *san* 等の接辞で終わる項目は *dhātu*（「動詞語根」）と呼ばれることを規定する。

<sup>29</sup>VP 3.7.89.10 を見よ。

- [1] *jīvati* (「彼は生きている」)  
 [2] *prāṇān dhārayati* (「彼は生気を保持している」)  
 [3] *mriyate* (「彼は死ぬ」)  
 [4] *prāṇān jahāti* (「彼は生気を放棄する」)  
 [5] *asti* (「それは存在する」)  
 [6] *ātmānaṃ bibharti* (「それは自己を保持している」)

[1]・[3]・[5] はそれぞれ [2]・[4]・[6] に等価である。バルトリハリは、*jīv* に関し以下のように述べている。

VP 3.14.71: *prāṇair vinā yathā dhārir jīvatau prāṇakarmakaḥ /*  
*na cātra dhārir na prāṇā jīvatis tu kriyāntaram //*

「例えば、*prāṇa* (「生気」) という [部分の随伴] はないのにもかかわらず、*jīv* においては、生気を<目的>とする動詞語根 *dhāri-* (← *dhṛ + ṇic*) [が表示する保持<行為>が理解される]。この [*jīv* という動詞語根] には *dhāri-* という [部分] も *prāṇa* という [部分] もない。そして動詞語根 *jīv* が表示する意味は、[生気でも保持<行為>でもない、それらとは] 異なる [生命の保持<行為>という] <行為>である」

生きる<行為>の本質は生気の保持であり、死ぬ<行為>の本質は生気の放棄である。また存在<行為>の本質は自己保持である。このように *jīv* 等はその意味の中に<目的>を包含している。さらに「生きている」とは「生きる<行為>をもたらしめている」ということでもあるから、内的な<目的>を包含しているということもできよう。しかしながら、ここで留意しなければならないのは、バルトリハリが指摘するように、*jīv* の意味に生気という<目的>とその保持の<行為>を弁別して想定するのは、概念的な分析に過ぎないという点である。実際には、*jīv* からは生気の保持という無区分の複合的な意味が理解される。

## 2.2.2 正語説明のための区分

パーニニは、正語の説明のために派生動詞語根を設定し、語基と接辞の区分に応じて、語基の意味としての<目的>と接辞の意味としての<行為>を明確に区分する文法規則を定式化している。言うまでもなく、文法学においては、正語の説明のために、語基と接辞の区分が概念的に設定されるように、それらの意味の区分もまた概念的に設定される。*jīv* の場合と同じように、実際の言語運用においては<目的>と一体化した<行為>が派生動詞語根とみなされる動詞語根の意味である。

### 2.2.2.1 *putrīya-*

次の規則を見よ。

A 3.1.8 *supa ātmanaḥ kyac //*

「欲求<行為>の<目的>であり、まさに欲求<行為>の主体自身と関係するものを表示する名詞接辞で終わる項目の後に、それに対する欲求<行為> (*icchā*) が表示されるべきとき、*kyac* 接辞が任意に起こる」

この規則は以下の [1] を説明する。

[1] *putrīyati*（「彼は自分の息子を望む」）

[2] *ātmanaḥ putram icchati*

[1]は意味的に[2]に等価である。*putrīya-*は語基の意味として息子、接辞の意味として欲求<行為>を有する。[2]において*putrīya-*の部分として想定される*putra*（「息子」）も動詞語根*iṣ*（「欲求する」）も概念的設定に過ぎない。*putrīya-*は、息子に対する欲求<行為>、息子という<目的>と一体化した欲求<行為>を表示する。バルトリハリは次のように述べている。

VP 3.14.70: *putrīyatau na putro 'sti viśeṣecchā tu tādrśī /  
vinaiva putrānugamād yā putre vyavatiṣṭhate //*

「*putrīya-*においては*putra*（「息子」）[という部分]は存在しない。しかし、[実際には]*putra* [という部分]の随伴はないのにもかかわらず、息子を対象として存立するそのような特殊な欲求（*viśeṣecchā*）[がその派生動詞語根によって表示される]」

[1]における*putrīya-*は、息子という<目的>を内的<目的>とする。したがって、「<目的>をもたない動詞語根」である<sup>30</sup>。

しかし以下の[3]における*putrīya-*はA 3.1.8に基づく*putrīya-*とは異なる。

[3] *putrīyati chātram*（「彼は生徒を息子のよう扱う」）

[4] *putram iva ācarati chātram*

[3]における*putrīya-*は次の規則に基づく。

A 3.1.10 *upamānād ācāre //*

「比喩基準（*upamāna*）である<目的>を表示する名詞接辞で終わる項目の後に、扱う<行為>（*ācāra*）が表示されるべきとき、*kyac*接辞が任意に起こる」

[3]は[4]に等価である。比喩基準である息子は内的<目的>であり、*putrīya-*の意味は比喩対象（*upameya*）である外的な<目的>としての生徒を期待する。この場合、*putrīya-*は<目的>を有する動詞語根である。

### 2.2.2.2 *muṇḍi-*

A 3.1.10に基づく*putrīya-*と同様（[3]）、内的な<目的>を有しながら、外的な<目的>をも有する派生動詞語根は以下の規則に基づく派生動詞語根である。

A 3.1.21 *muṇḍamiśraślakṣṇalavaṇavratavastrahalakalākṛtatūstebhyo ṇic //*

「名詞語基 *muṇḍa*（「はげ頭の」）、*miśra*（「混合した」）、*ślakṣṇa*（「なめらかな」）、*lavaṇa*（「塩」）、*vrata*（「誓」）、*vastra*（「衣」）、*hali*（「すき」）、*kali*（「カリさいころ」）、*kṛta*（「クリタさいころ」）、*tūsta*（「もつれ髪」）の後に、動詞語根 *kṛ*（「なす、実現する」）の意味が表示されるべきとき、*ṇic*接辞が起こる」

<sup>30</sup>ヘーラーラージャはこのことを次のように説明する。Prakāśa on VP 3.14.71 (185.28–29): *atra ca viśiṣṭakarmikaivaṃrūpā kriyā pratīyata ity antarbhūtatvāt karmaṇo 'karmakavyapadeśam āśādayati yathā //*（「そしてこの [jīva] においては、まさに特定の<目的>を有するこのような形の<行為>が理解されるから、<目的>が [動詞語根の意味] に内含されることに基づき、[この<行為>は]「<目的>をもたない [動詞語根]」という呼称をもたらす」）

以下の文を見よ。

[1] *muṇḍayati māṇavakam* (「彼は少年を剃髪する、少年をはげ頭の者とする」)

[2] *miśrayati tilān* (「彼はゴマを混ぜる、ゴマを混合したものとする」)

バルトリハリはこれらの派生動詞語根について次のように述べている。

VP 3.14.69: *muṇḍisūtryādayo 'sadbhir bhāgair anugatā iva /  
vibhaktāḥ kalpitātmāno dhātavaḥ kuṭṭhicarcivat //*

「派生動詞語根 *muṇḍi-*・*sūtri-*等は<sup>31</sup>、[正語説明のために] 概念的に構想された本質をもつものとして部分に区分されるがゆえに、あたかも非実在の部分を随伴しているかのように見える。しかしそれらは[実際には] 動詞語根 *kuṭṭ* (「分割する」)・*carc* (「読む」) と同様[無区分の] 動詞語根である」

派生動詞語根 *muṇḍi-*は、実際にはそれ自体無区分の単一体であるが、語基 *muṇḍa* と接辞 *nic* に概念的に区分され、その意味もはげ頭の者 (*muṇḍa*) と *kr* (「なす、実現する」) の意味に概念的に区分される。したがって、派生手続き上は、*muṇḍi-*は語基の意味としてはげ頭の者、接辞の意味として *kr* の意味を有する有区分のものとして扱われる。よって、派生手続き上は、*muṇḍi-*は内的<目的>を有するものとみなされる。*kr*の意味に対する内的<目的>であるはげ頭の者、誰をはげ頭の者とするのかそれに関係する少年という外的<目的>が期待される。この外的<目的>によって *muṇḍi-*は<目的>を有する動詞語根となる<sup>32</sup>。[2]の *miśri-*の場合も同様に考えることができる。

### 2.2.2.3 *bāṣpāya-*

次の派生動詞語根の使用を見よ。

[1] *bāṣpāyate* (「彼は涙を流す」)

[2] *bāṣpam udvamati* (「彼は涙を出す」)

[3] *ūṣmāyate* (「熱を発する」)

[4] *ūṣma udvamati* (「熱を出す」)

[5] *romanthāyate* (「反芻する」)

[6] *romantham vartayati* (反芻を引き起こす)

[1]・[3]・[5]はそれぞれ直後の文と等価である。以下の規則が考慮される。

<sup>31</sup>*sūtri-* (「ストラを作る」)は、A 3.1.26 *hetumati ca* に対する追加規定である vt. 5: *tat karotīty upasaṃkhyānaṃ sūtrayatyādyaṥartham* に基づき、名詞語基 *sūtra* の後に「xを作る」という意味を表示する *nic* が導入された派生動詞語根である。

<sup>32</sup>ヘーラーラージャはこの外的<目的>要請の理由を次のように説明している。Prakāśa on VP 3.14.69 (185.15–17): *guṇatvena nityasāpekṣā vā muṇḍādayo bāhyena guṇinā māṇavakādīnā yujyanate / keśacchedanaṃ vā kriyāviśeṣarūpaṃ karoteḥ karma / tadviśiṣṭasya tu māṇavakādī karma /* (「はげ頭の者等は、従属者 (*guṇa*) として[主要者を]必ず期待するものであるから、外的な主要者 (*guṇin*) である少年等と結合する。あるいは、剃髪という特殊な<行為>が[接辞の意味である]動詞語根 *kr* の意味の<目的>である。その[剃髪という特殊な<行為>]に限定された[動詞語根 *kr* の意味]が少年等を<目的>とする」) 第一解釈では、*māṇavakam muṇḍam karoti* (「少年をはげ頭の者とする」) という等価文が想定され、第二解釈では、*māṇavakasya keśacchedanaṃ karoti* (少年の剃髪をなす) という等価文が想定される。ヘーラーラージャは VP 3.7.89.15 においては第二解釈を提示している。

A 3.1.16 *bāṣpoṣmabhyām udvamane //*

「それらの表示対象が＜目的＞である *bāṣpa*（「涙」）・*ūṣman*（「熱」）という語の後に、発出＜行為＞（*udvamana*）が表示されるべきとき、*kyañ* 接辞が起こる」

A 3.1.15 *karmaṇo romanthatapobhyām varticaroh //*

「その表示対象が＜目的＞である *romantha*（「反芻」）という語の後に、動詞語根 *varti-* (*vrt + nic*)（「引き起こす」）の意味が表示されるべきとき、さらに、その表示対象が＜目的＞である *tapas*（「苦行」）という語の後に、動詞語根 *car*（「実践する」）の意味が表示されるべきとき、*kyañ* 接辞が起こる」

派生動詞語根 *bāṣpāya-*・*ūṣmāya-*・*romanthāya-* は、涙・熱・反芻という明示的な内的＜目的＞を有し、外的な＜目的＞を期待しない<sup>33</sup>。

2.2.2.4 *namasya-*

以下の文を見よ。

[1] *namasyati devān*（「彼は神々に供養する」）

[2] *namo devebhyaḥ*（「神々に敬礼」）

[1]における動詞語根 *namasya-*の派生は次の規則による。

A 3.1.19 *namovarivaścitraṇaḥ kyac //*

「*namas*（「敬礼」）・*varivas*（「崇拜」）・*citra*（「驚異」）の後に、動詞語根 *kr*（「なす、実現する」）の意味が表示されるべきとき、*kyac* 接辞が任意に起こる」

[2]においては不変化詞（*avyaya*）である *namas* が使用され、神を意味する名詞語基 *deva* の後には、第2格接辞が生起している [1]と違って、第4格接辞が生起している<sup>34</sup>。この第4格接辞の導入は次の規則による。

A 2.3.16 *namaḥsvastisvāhāsvadhāḥvaṣaḍyogāc ca //*

「*namas*（「敬礼」）・*svasti*（「幸福あれ」）・*svāhā*（「捧げよ」）・*svadhā*（「捧げよ」）・*alam*（「匹敵する」）・*vaṣaṭ*（「ヴァシャット」）と結びつく項目の後にも第4格接辞が生起する」

*namasya-*において、語基の意味としての敬礼・供養は接辞の意味である *kr*の意味に相関する内的＜目的＞である。*muṇḍi-*の場合と同様に外的＜目的＞の措定は説明できる。ヘーラーラージャは、A 3.1.19 に対する *Vārttika* と *Bhāṣya* の議論に基づき、*namasya-*において語基 *namas* の意味は内的＜目的＞であり、この語基 *namas* に依拠して [1] の *deva* に A 2.3.16 が適用されるということはないとする<sup>35</sup>。

<sup>33</sup>VP 3.7.89.16 を見よ。

<sup>34</sup>以下に述べる A 2.3.16 中の *namas* は A 1.1.37 *svarādinipātam avyayam* により *avyaya*（不変化詞）呼ばれる。

<sup>35</sup>[1]における第4格接辞導入の問題は本稿の主題ではない。ヘーラーラージャの説明 VP 3.7.89.19–22 を見よ。

### 2.2.3 外的〈目的〉の特質

ヘーラーラージャの当該議論の中で興味深いのは、外的〈目的〉を有する動詞語根の特質と内的〈目的〉のみを有する動詞語根の特質を「〈目的〉自身を表示する語 (svaśabda) による〈目的〉の表示」という視点から説明していることである<sup>36</sup>。彼は以下の文を挙げる。

[1] *pacati pākyaṃ* (「彼は料理されるべきものを料理している」)

[2] *bhinatti bhedyam* (「彼は切断されるべきものを切断している」)

[3] *\*jīvati prāṇān*

*pac* (「料理する」)・*bhid* (「切断する」)といった外的〈目的〉を有する動詞語根の場合には、〈目的〉は〈目的〉自身を表示する語、すなわち〈目的〉を表示する *pākya* (「料理されるべき (x)」)・*bhedyā* (「切断されるべき (x)」)といった *kr̥tya* 接辞で終わる項目によって表示される<sup>37</sup>。これに対して *jīv* (「生きる」)といった内的〈目的〉のみを有する動詞語根の場合には、その内的〈目的〉をその〈目的〉自身を表示する語である *prāṇa* (「生氣」)といった語によって表示することはできない。

## 2.3 〈目的〉の周知性

動詞語根にとっての〈目的〉の周知性とは、動詞語根とともにその動詞語根の〈目的〉を表示する項目が使用されなくても、逸脱なく特定の〈目的〉が理解されることである<sup>38</sup>。ヘーラーラージャは、〈行為〉の本質の効力 (*kriyāsvarūpasāmarthya*)、地域 (*deśa*)・時間 (*kāla*)、〈行為主体〉の効力 (*karṭṛsāmarthya*)、社会 (*goṣṭhī*)・地域の違いに応じて、動詞語根が外的〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる例を挙げる。

### 2.3.1 〈行為〉の本質の効力

ヘーラーラージャは *vṛṣ* を例として挙げる。

[1] *varṣati* (「[神が] 雨を降らす」)

[2] *vṛṣto devaḥ* (「神が雨を降らせた」)

[3] *rudhiraṃ varṣati* (「彼は血を降らす」)

[4] *śarān varṣati* (「彼は矢を降らす」)

[5] *pāṃsavo vṛṣtāḥ* (「埃が注がれた」)

[1]は完結文である。ヘーラーラージャによれば、逸脱なく神が〈行為主体〉として、雨水が外的〈目的〉として理解される<sup>39</sup>。[1]においては、〈目的〉は理解されるものの、その〈目的〉を表示する項目が使用されないことをもって、*vṛṣ*は外的〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる。した

<sup>36</sup>VP 3.7.89.17 を見よ。

<sup>37</sup>*pākya*・*bhedyā* はそれぞれ動詞語根 *pac*・*bhid* の後に *kr̥tya* 接辞 *nyat* が〈目的〉表示のために導入された語形である (A 3.1.124 *ṛhalor nyat*)。

<sup>38</sup>VP 3.7.88.4 を見よ。

<sup>39</sup>VP 3.7.88.4 を見よ。

がって [2] におけるように、*vṛṣ* には A 3.4.72 *gatyarthākarmakaśiṣāśīnsthāsavasajanaruhaḥjīryatibhyaśca* が適用され<sup>40</sup>、その後に〈行為主体〉を表示する *ka* 接辞が起こる<sup>41</sup>。

一方、[3]・[4] における血・矢のように、*vṛṣ* の〈目的〉としては周知されていない、表現されなければ理解されない〈目的〉によっては、*vṛṣ* は〈目的〉を有する動詞語根となる。よって [5] のように *vṛṣ* に後続する *ka* 接辞は A 3.4.70 *tayor eva kṛtyaktakhalvarthāḥ* により〈目的〉を表示する<sup>42</sup>。

### 2.3.2 地域・時間

地域・時間が限定されるとき、動詞語根の〈目的〉は表現されなくても周知なものとして理解される。このような場合も、当該の動詞語根は外的〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる。ヘーラーラージャは以下の文を挙げる。

[1] *dakṣiṇāpathe pūrvāhṇe pacyatām* (「南の地域では昼前に料理せよ」)

ヘーラーラージャによれば、この表現からは料理〈行為〉の〈目的〉としてヤヴァーグー粥 (*yavāgū*) が理解される。そして、「午後には」 (*aparāhṇe*) と言われた場合には米粥 (*odana*) が、肉が豊富に手に入る地域では、肉がそれぞれ料理〈行為〉の〈目的〉として理解される<sup>43</sup>。

### 2.3.3 〈行為主体〉の効力

悪人は悪事を働き、善人は善事をなす。

[1] *durjanaḥ karoti* (「悪人がなす」)

[2] *sujanaḥ karoti* (「善人がなす」)

悪人のなす〈行為〉の〈目的〉として悪事が、善人のなす〈行為〉の〈目的〉として善事が逸脱なく理解される。それらの〈目的〉は表現される必要がない。このような場合も *kṛ* は外的〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる<sup>44</sup>。

### 2.3.4 社会・地域の違い

ヘーラーラージャは、例は無数にあるとして、例文を上げない<sup>45</sup>。

<sup>40</sup>A 3.4.72 は、進行を意味する動詞語根・〈目的〉をもたない動詞語根・*ślis* (「抱擁する」)・*śt* (「横になる」)・*sthā* (「立つ」)・*ās* (「座る」)・*vas* (「住む」)・*jan* (「生まれる」)・*ruh* (「上る」)・*jī* (「老いる」) の後に、〈行為主体〉が表示されるべきとき、*ka* 接辞が起こることを規定する。

<sup>41</sup>*jalam varṣati* (「雨水を降らす」) というように〈目的〉自身を表示する語によって〈目的〉を表示することができる。このことは *vṛṣ* が雨水を内的〈目的〉としないことを示す。VP 3.7.89.18 を見よ。

<sup>42</sup>A 3.4.70 は、*kṛtya* 接辞、*ka* 接辞、*khal* 接辞、*khal* 接辞の意味を有する接辞は〈行為〉 (*bhāva*) と〈目的〉を表示することを規定する。

<sup>43</sup>VP 3.7.89.23 を見よ。

<sup>44</sup>VP 3.7.89.25 を見よ。

<sup>45</sup>社会・地域によって *varṣati* と同じように逸脱なく〈目的〉が理解される例としては、日本語で言えば野球界での「投げる」「打つ」があるであろう。ボールという〈目的〉が逸脱なく理解される。



## 2.4 表現意図の欠如

外的〈目的〉を有する動詞語根であっても、外的〈目的〉が表現しようとして意図されない場合は、外的〈目的〉をもたない動詞語根とみなされる。

〈目的〉が表現しようとして意図されない場合とは、〈目的〉以外の他の事項が表現しようとして意図される場合である。このような場合とは、(1) 〈行為〉の否定、(2) 〈行為〉の類似性、(3) 特定の〈目的〉能力、(4) 〈行為〉の不停止が表現しようとして意図される場合である。

例文は以下のとおりである。

- [1] *neha pacyate* (「ここでは調理しない」)
- [2] *neha bhujyate* (「ここでは食べない」)<sup>46</sup>
- [3] *dikṣito na dadāti* (「潔斎者は布施をしない」)
- [4] *dikṣito na pacati* (「潔斎者は調理しない」)
- [5] *dikṣito na juhoti* (「潔斎者は護摩供養をしない」)
- [6] *anuvadate kathaḥ kalāpasya* (「カタ派の者はカラパー派の者にならって吟唱する」)
- [7] *devadattaḥ kiṃ karoti—pacati/vravīti* (「デーヴァダッタは何をしている—料理している・話しをしている」)
- [8] *pacaty eva* (「彼はいままさに料理中である」)<sup>47</sup>
- [9] *dadāty eva* (「彼はいままさに布施の最中である」)

[1]–[5] が (1) の場合、[6] が (2) の場合、[7] が (3) の場合、[8]–[9] が (4) の場合である。[8]・[9] は着手された〈行為〉が現在進行中であり、中断がないことを示す。

なお、[6] に関しては次の規則が考慮される。

### A 1.3.49 anor akarmakāt //

「発音の明瞭な者たちを〈行為主体〉とする、〈目的〉をもたない、*upasarga* である *anu* が先行する *vad* の後に *ātmanepada* 接辞が起こる」

[6] は、祭詞 (*yajus*) をカラパー派の者が明瞭に発音するその発音のとおりカタ派の者が発音する、という意味である<sup>48</sup>。

<sup>46</sup>*pacyate*・*bhujyate* における定動詞接辞-*te* は *bhāva* (〈行為〉) を表示する。[1]・[2] は非人称構文である。VP 3.7.88.6 を見よ。

<sup>47</sup>料理〈行為〉の〈目的〉が表現しようとして意図されない *pacaty eva* は、*pākaṃ karoty eva* (「彼はいままさに料理〈行為〉をなしている」) と換言される。この場合料理〈行為〉は内的〈目的〉である。一方、例えば *odanaṃ pacati* (「彼は粥を調理している」) というように料理〈行為〉の〈目的〉が表現しようとして意図される場合には、*pākaṃ karoty eva* (「彼は料理によって粥を実現している」) というように、外的〈目的〉を生ぜしめるハタラクに対して料理〈行為〉は〈手段〉となる。これはミーマンサー学派クマーリラ (*Kumārila*) の *bhāvanā* 理論に通じる考えであるが、重要なのは、この場合の料理〈行為〉とは、その〈行為〉をなす一連の部分的〈行為〉 (*avayavakriyā*) であることである。よって、*odanaṃ pacati* は「彼は料理〈行為〉の一連の部分的〈行為〉を遂行することによって粥を生ぜしめている」ということを意味することになる。VP 3.7.87.16–17 を見よ。

<sup>48</sup>KV on A 1.3.49: *yathā kalāpo 'dhīyāno vadati tathā kathaḥ ity arthaḥ /*  
 〈目的〉を有する、*upasarga* である *anu* が先行する *vad* の後には *parasmaipada* 接辞が起こる。*pūrvam eva yajur uditam anuvadati* (「彼はまさに前に吟唱した祭詞を復唱する」) なお、[6] における *kalāpa* の後への第 6 格接辞導入は A 2.3.72 *tulyārthair atulopamābhyāṃ ṛtīyānyatarasyām* によって説明される。

### 3 VP 3.7.87-89 の意義

バルトリハリが<目的>論題を VP 3.7.87-89 の三詩節で締め括る理由は何であろうか。

バルトリハリはまずもって VP 3.7.87 において<目的>の理論的分析の結果として、<行為>に対する対象性を獲得するものが<目的>であることを結論した。この<行為>に対する対象性の獲得という概念は、如何なる<行為>も<目的>を有するという理論的帰結を導く。そこでバルトリハリは続く二詩節においては、動詞語根の意味に相関する外的な<目的>と内的な<目的>という枠組みを導入することによって、理論的分析を実際の言語運用の観察によって制限した。バルトリハリによれば、実際の言語運用を説明するための文法学においては、実際の言語運用に立脚して「<目的>を有する動詞語根」(sakarmaka) と「<目的>をもたない動詞語根」(akarmaka) の区分が成立する。動詞語根は、<目的>が共表現されるとき「<目的>を有する動詞語根」(sakarmaka) であり、<目的>が共表現されないとき「<目的>をもたない動詞語根」である。

<目的>という kāraka は、意味論的に<行為>の実現に必須の kāraka であり、他方それは表現のレベルでは、必ずしも言語表現される必要のないものであること、これが<目的>論題最終三詩節を通じてバルトリハリが意図するところであると考えられることができる。

## VP 3.7.87–89 注釈和訳研究

\*底本は Iyer [1963] である。句読法は刊本に必ずしも忠実ではない。適切な句読法を提案している。

[VP 3.7.87.0.1] gatam etat / iha katham karmatvaṃ guḍam bhakṣayati iti / guḍo hi nirvṛtto bhakṣaṇakriyā-gataṃ na kaṃcana viśeṣam ākāṅkṣati [/]

以上了。

以下の事例、すなわち *guḍam bhakṣayati* (「彼は糖蜜 (guḍa) を食べる」) において、どうして [糖蜜が] <目的>であることが成立しよう。何となれば、糖蜜は、<すでに実現しているもの> (nirvṛtta) であり、もはや飲食<行為>に由来する如何なる特性 (viśeṣa) も [その実現に関し] 期待しないからである。

[VP 3.7.87.0.2] na tathepsitam api tu bhakṣaṇakriyāyā āśrayaviśeṣapradarśanārtham upādīyata iti kriyārtham etad dravyam /

そのような場合、[糖蜜は] 得ようと望まれる [<目的>] ではなく、飲食<行為>の特定の拠所 (āśraya) を明示するために言及されている。したがって、この [糖蜜という] 実体 (dravya) は、[飲食という] <行為>を目的としている。

[VP 3.7.87.0.3] na tu dravyasaṃskārārthā kriyā, dantāvacūrṇanādi na bhakṣaṇakriyāphalam, api tv annādanādirūpābhyavahāralakṣaṇasya bhakṣaṇasya prītiḥ tṛptilakṣaṇā phalam iti nāsti kriyākṛto 'tra kaścāno-tpattyādiviśeṣaḥ / tad uktaṃ vārttike /

しかし、[飲食] <行為>が [糖蜜という] 実体の<浄化・完成> (saṃskāra) を目的としているということはない。[そして] 歯による咀嚼等は飲食<行為>の結果ではない。そうではなくて、食べ物を食べる等の摂食と特徴付けられる飲食は、満足 (tṛpti) と特徴付けられる悦び (prīti) を結果とする。したがって、当該事例においては、<行為>に基づく生起 (utpatti) 等の特性は決して見出されない。それゆえ Vārttika に次のように述べられている。

īpsitasya karmasaṃjñāyāṃ nirvṛttasya kārakatve karmasaṃjñāprasaṅgaḥ, kriyepsitatvāt<sup>49</sup>

Vt. 1 on A 1.4.49: 「得ようと望まれるものが<目的>と呼ばれるならば、<すでに実現しているもの> (nirvṛtta) が kāraka である場合、それに対する術語<目的>の適用は結果しない。なぜなら、<行為>が [<行為主体>によって] 得ようと望まれるからである」

iti /

[VP 3.7.87.0.4] nirvṛttasya iti nirvartyakarmatāṃ pratikṣipati / upalakṣaṇam caitat / vikārdyabhāvāt karmāntaratāpi nāsti / nirākaṅkṣasya vety arthaḥ /

「<すでに実現しているもの>」(nirvṛtta) という表現によって、[当該の kāraka が] 実現されるべき<目的> (nirvartyakarman) であるということを排斥している。そして、これは典型提示である。変容 (vikāra) 等もないから、[<変容対象>等といった] 他の<目的>であることもない。

「[<すでに実現しているもの>、] あるいは [変容に対する] 期待がないもの (nirākaṅkṣa) が」という意味である。

<sup>49</sup>Vt. 1 on A 1.4.49: īpsitasya karmasaṃjñāyāṃ nirvṛttasya kārakatve karmasaṃjñāprasaṅgaḥ kriyepsitatvāt //

[VP 3.7.87.0.5] kārakatve iti kriyāsiddhau nimittabhāvam āha / bhakṣaṇakriyāniṣpattyarthaṃ guḍasyopādānāt /

「kāraka である場合」という表現によって、[<すでに実現しているもの>が] <行為>の実現 (kriyāsiddhi) に対する根拠 (nimitta) であることを述べている。なぜなら、飲食<行為>の実現のために糖蜜が使用されるからである。

[VP 3.7.87.0.6] ata eva bhakṣaṇāya guḍa iti kriyaiva sandarśanādibhir āpyamānatvād īpsitā karma, na tu dravyam<sup>50</sup>/ bhakṣaṇamātram hi guḍasyepsitam na tu bhakṣaṇapratyākhyānenānyas tatkrto viśeṣaḥ / atra vārttike parihāra uktaḥ /

まさにこのゆえに、飲食のために糖蜜があるから、[糖蜜という] 実体ではなく、[飲食という] <行為>こそが、[糖蜜の] 知覚をはじめとする [活動着手までの一連の<行為>] を通じて得られるものであるから、得ようと望まれるものであり、<目的>である<sup>51</sup>。

実に、糖蜜については、それを飲食することだけが得ようと望まれる。しかし、飲食を排して、[飲食] 以外にその [飲食] に基づく特性 [が得ようと望まれること] はない。

このことに関し、Vārttika にこの難点の回避が述べられている。

na vobhayepsitatvāt<sup>52</sup>

Vt. 2 on A 1.4.49: 「否むしろこのような問題は起こらない。なぜなら、[糖蜜と飲食の] 双方が [<行為主体>によって] 得ようと望まれるからである」

iti /

[VP 3.7.87.0.7] tatra kathaṃ guḍāder īpsitavm ity etad vyākhyātum āha /

その場合、どうして糖蜜等が得ようと望まれるものなのか、このことを説明するために [バルトリハリは以下の詩節を] 述べる。

VP 3.7.87: yan nirvṛttāśrayaṃ karma prāpter apracitaṃ punaḥ /  
bhakṣyādiviṣayāpattiyā bhidyamānaṃ tad īpsitam //

「<すでに実現しているもの>を拠所とする、しかし、[飲食行為との] 関係 (prāpti) からは [どんな特性も] 付加されない <目的> [能力] は、飲食等の [<行為>] に対する対象 [性] の獲得によって差異化されるから、得ようと望まれるものである」

[VP 3.7.87.1] nirvṛtto niṣpanno 'ta eva nirākāṅkṣaḥ āśrayo guḍādi dravyaṃ yasya karmaṇaḥ karmaśakter iti nirvartyakarmatāvvyudāsaḥ /

[複合語 *nirvṛttāśraya* は、*bahuvrīhi* であり、] すでに実現している (*nirvṛtta* = *niṣpanna*)、まさにこのゆえに [実現に対する] 期待が充足されている、拠所 (*āśraya*)、すなわち糖蜜等の実体、それと関係する <目的>、すなわち <目的> の能力 (*karmaśakti*) を指示する。したがって [この表現によって] <実現対象> (*nirvartya*) という <目的> であることが排除される。

<sup>50</sup>Iyer: *dravyasya*. Raghunātha の読みに従う。

<sup>51</sup>本論注 12 を見よ。

<sup>52</sup>Vt. 2 on A 1.4.49: na vobhayepsitatvāt //

[VP 3.7.87.2] vikārānākāṅkṣaṇāc ca vikāryatāpi vyudastā /

さらに変容 (vikāra) を期待しないから、〈変容対象〉 (vikārya) であるということもまた排除される。

[VP 3.7.87.2] prāpter apracitam iti / prāpter bhakṣaṇakriyāsaṃbandhād yo 'pi pracayāpacayayor viśeṣas tenāprayuktam apracitam iti prāpyakarmatāpi vyudastā pūrvapakṣe / ādyena hi kārikārdhena pūrvapakṣa-vārttikārthaḥ saṅgrhītaḥ /

「[飲食行為との] 関係 (prāpti) からは [どんな特性も] 付加されない」(prāpter apracitam) : 関係 (prāpti)、すなわち飲食〈行為〉との関係 (saṃbandha) に基づいて、増減のうちのいずれの特性とも結びつかないから、[当該の〈目的〉は、どんな特性も] 付加されることのない [〈目的〉] である。したがって、〈到達対象〉 (prāpya) という〈目的〉であることも排除される。

以上が前主張における主張である。実に、当該詩節の前半は、前主張を述べる vārttika の意味を要約している。

[VP 3.7.87.3] dvitīyenārdhenottaravārttikavyākhyānam / bhakṣibhujyādikriyāviśayabhāvāpattiyā bhidyamānaṃ viśiṣyamānaṃ guḍādīpsitaṃ prāpyam etat karmety arthaḥ /

当該詩節の後半は、答論の vārttika を説明している。

飲食・食等の〈行為〉に対する対象性を獲得すること (viśayatāpatti) によって [その対象性を獲得していない他のものから] 区別される (bhidyamāna)、すなわち差別化 (viśiṣyamāna) される限りで、糖蜜等は得ようと望まれる。したがってこれは〈到達対象〉 (prāpya) としての〈目的〉である。このような意味である。

[VP 3.7.87.4] tathā hi, na bhakṣaṇādikriyāivātrepsitā / evaṃ hi loṣṭham api bhakṣayitvā kṛtī bhavet / nāpi guḍaḥ kriyāntarāśrayatvenepsitaḥ, api tu bhakṣaṇāśrayatvenety ubhayam āśrayāśrayibhāvena samuditam īpsitaṃ / yasya hi guḍabhakṣaṇam īpsitaṃ tasya guḍo 'pīpsitaḥ /

すなわち、飲食等の〈行為〉だけがこの場合の得ようと望まれるものであるということはない。実にこのような場合には、土塊を食べても満足することになる。

糖蜜が他の〈行為〉の拠所として得ようと望まれるということもない。そうではなくて、糖蜜は飲食の拠所として得ようと望まれる。

したがって、[飲食等の〈行為〉と糖蜜の] 双方が、[一方が] 拠所として、[他方が] その拠所に依拠するものとして、相互に結びついて一体的に (samudita) 得ようと望まれる。

なぜならば、糖蜜の飲食を得ようと望む者は糖蜜をも得ようと望むからである。

[VP 3.7.87.5] bhakṣaṇakriyāsaṃbandha eva cātra kriyākṛto viśeṣaḥ prāpyakarmatāyām viśeṣāntarasyānākāṅkṣaṇāt / anyathā nirvartyavikārābhyām ko viśeṣaḥ syāt /

この場合の〈行為〉に基づく特性は飲食〈行為〉との関係そのものである。なぜなら、〈到達対象〉という〈目的〉である場合、[〈行為〉との関係以外に] 他の特性が期待されることはないからである。もしそうでないとすると、実現対象・変容対象とどんな違いがあろう。

[VP 3.7.87.6] bhakṣaṇasya prītyatīśayo 'tra phalam / sa ca guḍasya tatsaṃbandhe sati ghaṭata ity ayam eva viśeṣaḥ kriyākṛtaḥ / svānurūpaphalaprāsavayogyatā hi saṃskāraḥ /

当該事例では、飲食は卓越した悦び (prītyatīśaya) を結果とする。そしてその [卓越した悦び] は、糖蜜がその [飲食] と関係する場合に起こるから、まさにこの [飲食との関係]こそが<行為>に基づく特性である。

実に、[実体]自身に相応しい結果の産出に対する能力が<浄化・完成によって覚醒されるもの> (saṃskāra) である<sup>53</sup>。

[VP 3.7.87.7] nanu ca tṛptilakṣaṇāyām prītau guḍo 'ṅgam iti katham pradhānakāraḥ karmatvam asya<sup>54</sup> /

[反論] 満足と特徴付けられる悦びに対して糖蜜は従属因 (aṅga) である。したがって、[得ようと望まれるのは悦びであって糖蜜ではないから、] どうしてこの [糖蜜] が [飲食<行為>に対する] 主要な kāraḥ としての<目的性> (karmatva) [すなわち<目的>能力] を持ち得よう。

[VP 3.7.87.8] ucyate / tṛptyaṅgatāyām guḍasyāyam itikartavyatāviśeṣo yad bhakṣikriyāviśayīkaraṇe tāṃ prati prādhānyam, nānyathā tṛptiḥ sampādayituṃ śakyā /

[答論] 答えよう。糖蜜が満足の従属因であるとき、次のことが具体的な実行様式 (itikartavyatāviśeṣa) となる。すなわち、[糖蜜が] 飲食<行為>の対象とされ、かつその [飲食<行為>] に対して主要なものとなることである。さもなくば、満足は実現され得ない。

[VP 3.7.87.9] tad asya tṛptyaṅgabhāve 'yaṃ prāthamakalpiko vyāpāraḥ / tadyathā guruḥ sevyamāno dharmotpattāv aṅgatām eti, tac cāsya paricaraṇakriyāviśayabhāvagamanam antareṇa na ghaṭanām etiti guruṃ śuśrūṣata iti prādhānyopapattiḥ /

それゆえ、この [糖蜜] が満足の従属因である場合、この [飲食<行為>に対する対象化 (bhakṣikriyāviśayīkaraṇa)] が何よりもまず最初に遂行されるべきハタラキである。

例えば、師は、[弟子に] 仕えられるときに、[弟子に] ダルマ (功德) が生ずることに対する従属因となる。そして、そのようなことは、この師による、侍従<行為>に対する対象性の獲得 (paricaraṇakriyāviśayabhāvagamana) なくしては起こりえない。したがって、guruṃ śuśrūṣate (「彼は師に仕える」) というように、[師に] 主要性が妥当する。

<sup>53</sup>バルトリハリは、スポーツ論において「声開顕論者」(abhivyaaktivādin) の三つの主張を説明する際、「まさに [聴覚] 器官の<浄化・完成>がなされる」(VP 1.80: indriyasyaiva saṃskāraḥ śabdasyaivobhayasya vā / kriyate dhvanibhir vādās trayo 'bhivyaaktivādinām // )、「音声 (dhvani) は生じるとき聴覚器官を<浄化・完成>する」(Vṛtti on VP 1.80 (145.2): dhvanir utpadyamānaḥ śrotraṃ saṃskaroti) という一つの主張を紹介する。ヴリシャバは、この<浄化・完成>について次のように説明している。

Paddhati on Vṛtti to VP 1.80 (144.25–28): śrotraṃ saṃskaroti iti / grahaṇāsamarthasya vā śrotrasya apūrvaśaktyādhānena saṃskāraḥ vidyamānaśaktiprabodho vā arthakriyāyām vā dvayasyāpi kevalaṃ sānnidhyamātram eva saṃskāro bhāyenaiva cikīṣita iti trayāḥ saṃskāravikalpāḥ / (「[スポーツを] 把握することができない聴覚器官は、新規に能力が付与されること (apūrvaśaktyādhāna) によって<浄化・完成>される。あるいは、現に存在する能力の覚醒という<浄化・完成>がまさに外的なものによって実現されようと望まれる。さらにあるいは、目的実現 (arthakriyā) に対して、[新規能力と現存能力の] 二者のいずれもが単に共存していることに他ならない<浄化・完成>が外的なものによって実現されようと望まれる。このように<浄化・完成>の解釈可能性には三つの選択肢がある」)

この言明から、<浄化・完成>には三種あることが知られる。新規の能力の付与・現存する能力の覚醒・新規能力と現存能力の共存である。当該事例においては、糖蜜に現存する卓越した悦びを与える能力の覚醒が意図されている。この覚醒が飲食によってもたらされる。

<sup>54</sup>Iyer: asyāḥ.

[VP 3.7.87.10] tad evam atra pūrvapakṣe dravyepsāpahnavena kriyāmātrasyepsā darśitā / atas tadānu-  
guṇyena parihāre dravyāpīpsā pradarśitā /

かくしてこのようにこの前主張においては、実体に対する獲得意欲を排除して〈行為〉だけが得ようと望まれることが示された。したがって、その〔前主張〕に応じて難点回避においては実体もまた得ようと望まれることが明示された。

[VP 3.7.87.11] yadi tarhi kriyāviśaya bhāvamātragamanena karmatāsiddhiḥ tathā sati sarvatra kriyāmātre  
'pi sakarmakatā syāt / tataś cākarmakavyapadeśāḥ śāstre virudhyeran /

〔反論〕 それではもし、〈行為〉に対する対象性の獲得だけによって〈目的〉であるということが成立するならば、そのような場合、すべての場合において、〈行為〉一般に関しても、〈目的〉を有するということが成立するであろう。そしてそれゆえ、「〈目的〉を持たない〔動詞語根〕」(akarmaka) という呼称は、文法学において不都合となるであろう。

[VP 3.7.87.12] na ca virudhyante / na hy avaśyaṃ kriyāmātre bāhyaviśayasambhavaḥ / kācid dhi kriyā  
kartary eva viśrāmyati / na tu bāhyabhāvam apekṣate / tadyathā āste, śete ityādi /

〔答論〕 しかし不都合となることはない。なぜなら、〈行為〉一般に必ず外的な〔すなわち動詞語根の意味とは異なる〕対象 (viśaya) が起こり得るということはないからである。実に、ある〈行為〉は〈行為主体〉にのみ休らい、外的な存在を期待するということはない。例えば、*āste* (「彼は座る」)・*śete* (「彼は横になる」) 等〔における座〈行為〉・横臥〈行為〉〕のように。

[VP 3.7.87.13] dvyarthaḥ pacir iti vacanāt sarvadhātuviśaye 'pi bhāvanālakṣaṇe vyāpāre dhātvartha  
evātra bhāvanāparyavasānāt sa eva bhāvyaḥ / āsanam karoti śayanam karoti iti /

「動詞語根 *pac* は二つの意味を有する」という言明があるから、どの動詞語根の領域においても、まさにこの動詞語根の意味が〈生ぜしめるハタラキ〉(bhāvanā) と特徴付けられるハタラキである場合には、〔その〈生ぜしめるハタラキ〉は実現されるべきものとして〕〈生ぜしめるハタラキ〉に帰着するから、まさにその〔動詞語根の意味〕そのものが生ぜしめられるべきもの (bhāvya) である。*āsanam karoti* (「彼は座行為をなしている」)・*śayanam karoti* (「彼は横臥行為をなしている」) というように<sup>55</sup>。

[VP 3.7.87.14] ata evātra bāhyabhāvaviśayaḥ praśno nāsti kim iti / yatra bāhyabhāvaniṣṭhā bhāvanā tatra  
tena bāhyena bhāvyaena karmaṇā sakarmakatvam / tatra ca kim ity anuyujyate / pacati kim odanam ityādi /

まさにこのゆえに、この場合には、〔動詞語根の意味以外の〕外的な存在を対象とする「何を」という質問はなされない。

〈生ぜしめるハタラキ〉が外的な存在に関与する場合には、その外的な生ぜしめられるべき〈目的〉によって、〔〈生ぜしめるハタラキ〉は〕〈目的〉を有するものとなる。そしてその場合には、「何を」と質問される。〔質問〕 *pacati kim* (「彼は何を調理しているのか」) — 〔答〕 *odanam* (「〔彼は〕粥を〔調理している〕」) 等というように。

<sup>55</sup>MBh on A 1.4.49 (I.332.17–18): iha hi taṇḍulān odanam pacatīti dvyarthaḥ paciḥ / taṇḍulān pacann odanam nirvartayātīti / (「実にこの〔*taṇḍulān odanam pacati* (「彼は米を調理して粥をつくっている」) という〕事例においては、動詞語根 *pac* は二者を意味する。〔当該の文は〕「米を調理して粥を実現している」という意味である」)

[VP 3.7.87.15] dhātvarthasya hi sarvatrāvyabhicārād bhāvvyatve 'pi na tena sakarmakākarmakavibhāgaḥ śakyakriyaḥ kālādikarmaṇeva [/] bāhyaṃ tu karma vyabhicaratīti tadapekṣo 'yaṃ vibhāgaḥ /

実に、動詞語根の意味は、すべての場合に逸脱なく生ぜしめられるべきものであるとしても、そのことによって〈目的〉を有する動詞語根の意味と〈目的〉を持たない動詞語根の意味の区別をなすことはできない。時間等の〈目的〉によって〔動詞語根の意味にその区別ができない〕ように<sup>56</sup>。

しかし、〔動詞語根の意味は〕外的なく目的〉を逸脱する。したがって、その〔外的なく目的〉〕を考慮してこの区別がなされる。

[VP 3.7.87.16] ataś ca śuddhāyā bhāvanāyā dhātvarthaḥ karma, dhātvarthaviśiṣṭāyāṃ tu bāhyaṃ karma / ata eva bāhyaniṣṭhāyāṃ bhāvanāyāṃ dhātvarthaḥ karaṇam iti nyāyavidaḥ / tenaudanaṃ pacati, pākenaudanaṃ bhāvayatīti vākyaṃ /

そしてこのゆえに、純粹なる〈生ぜしめるハタラキ〉は動詞語根の意味を〈目的〉とするが、〔〈手段〉としての〕動詞語根の意味に限定されたときには、外的〔な存在〕が〈目的〉である。

まさにこのゆえに、〈生ぜしめるハタラキ〉が外的〔な存在〕に関係するとき、動詞語根の意味は〈手段〉であると論理に通じた者達は主張する。それゆえ、*odanaṃ pacati*（「彼は粥を調理している」）という文は、「調理によって粥を生ぜしめている」（*pākenaudanaṃ bhāvayati*）ということの意味する。

[VP 3.7.87.17] yady apīha darśane bhāvanā dhātvartha eva tathāpi phalaparyantāsau kartṛvyāpārārūpā dīrghatarāvayavakriyāmātrāt pṛthag vyavahārasahā / evaṃ sarvatra yojyam //87//

たとえこの見解では、〈生ぜしめるハタラキ〉が動詞語根の意味に他ならないとしても、この〔〈生ぜしめるハタラキ〉〕は結果の実現に至るまで〈行為主体〉のハタラキを本質とし、〔一刹那〕以上の時間継起する部分的〈行為〉一般とは異なるものとして表現され得る。このようにすべての場合に解釈されるべきである<sup>57</sup>。

[VP 3.7.88.0] kvacit punar vastuto bāhyakarmasadbhāve 'py akarmakavyapadeśo bhavatīty āha /

しかしながら、ある場合には、実際には外的なく目的〉があるとしても、「〈目的〉をもたない〔動詞語根〕」という呼称が適用されることがある。このことを〔バルトリハリは以下の詩節で〕述べる。

VP 3.7.88: dhātor arthāntare vṛtter dhātvarthenopasaṃgrahāt /  
prasiddher avivakṣātaḥ karmaṇo 'karmikā kriyā //

「(1) 動詞語根が別の意味を表示することから、(2) 〈目的〉が動詞語根の意味によって包含されることから、(3) 〈目的〉の周知性から、(4) 〈目的〉に対する表現意図のないことから、〔動詞語根は〕 〈目的〉を持たない〈行為〉 [を表示するとみなされる]」

<sup>56</sup>バルトリハリは時間等の〈目的〉に関して次のように述べている。VP 3.7.67: kālabhāvādhvadeśānām antarbhūtakriyāntaraiḥ / sarvair akarmakair yoge karmatvam upajāyate //（「時間（kāla）、行為（bhāva）、道のり（adhvan）、国土（deśa）には、それらがいかなる動詞語根と結合しようとしてそれが表示する〈行為〉が〈目的〉を有する動詞語根であろうとそうでなかろうと一、動詞語根が意味として内包している別の〈行為〉によって〈目的〉たる在り方が生まれる」）小川 2012 を見よ。

<sup>57</sup>刹那的〈行為〉（*kriyākṣaṇa*）は〈行為〉ではない。VP 3.8.10: yaś cāpakarṣaparyantam anuprāptaḥ pratīyate / tatraikasmin kriyāśabdāḥ kevale na prayujyate //（「しかしながら、縮小の究極に至った〔ハタラキが〕理解される時、その単一〔没順序〕・単独〔無部分のハタラキ〕に〈行為〉という語は適用されない」）



[VP 3.7.88.1] prasiddhād arthād anyatrārthe yadā dhātur vartate tadā tatrāsyā karmasamanvayarahi-takriyā vācyā pratīyate /

動詞語根が周知の意味とは異なる意味を表示するとき、その〔動詞語根〕に関して、「この〔動詞語根〕は〈目的〉との結合を欠いた〈行為〉を表示対象とする」と理解される。

[VP 3.7.88.1] tadyathā vahatir deśāntaraprāṇavacanaḥ sakarmakaḥ prasiddho bhāraṃ vahatīti / sa yadā nadī vahatīty atra syandanakriyām abhidhāyī tadā syandanasya jalasrutirūpasya nadyātmabhūtāt vāt kim ity anuyogābhāvād akarmaka iti dhātvarthamātrāpekṣayeyaṃ bhāvanā vahati syandanaṃ karotīti /

例えば、動詞語根 *vah* は、*bhāraṃ vahati* (「彼は荷を運ぶ」) というように、[何かを] 別の場所に到達せしめる [〈行為〉] を表示し、〈目的〉を有する [動詞語根] として周知されている。

[しかし、] それ *nadī vahati* (「川が流れる」) というこの表現において流れる〈行為〉を表示するとき、水流を本質とする流れる [〈行為〉] は川の本質であるから、「何を」という質問は起こらず、よってそれは〈目的〉を持たない [動詞語根] である。したがって、*vahati* [の意味である] この〈生ぜしめるハタラキ〉は、動詞語根の意味だけに相関して、*syandanaṃ karoti* (「それは流れる〈行為〉をなしている」) というように換言される。

[VP 3.7.88.2] yadāpi dhātvarthakriyāyām karmāntarbhavati tadāpy akarmakatvam / tadyathā jīvati iti / prāṇān dhārayati iti hy atra dhātvartha iti prāṇalakṣaṇasya karmaṇo 'ntarbhāvaḥ /

〈目的〉が動詞語根の意味である〈行為〉に含まれるときも、[当該の動詞語根は] 〈目的〉を持たない [動詞語根] である。

例えば、*jīvati* (「彼は生きている」) というように。実に *prāṇān dhārayati* (「彼は生気を保持している」) というこの [意味] に「動詞語根の意味」と呼ばれる生気と特徴付けられる〈目的〉が含まれる。

[VP 3.7.88.3] evaṃ mriyate prāṇān jahāti iti / tathā asti ātmānaṃ bibharti iti /

同様に、*mriyate* (「彼は死ぬ」) は *prāṇān jahāti* (「彼は生気を放棄する」) というように換言され、それと同様に、*asti* (「それは存在する」) は *ātmānaṃ bibharti* (「それは自己を保持している」) というように換言される。

[VP 3.7.88.4] yatrāvyabhicāreṇa pratiniyatasya karmaṇaḥ pratītis tatrāpy akarmikā kriyeti vyavahāraḥ / tadyathā varṣati iti / atra hi yathā varṣaṇakriyāyām avyabhicārād devaḥ kartā pratīyate tathā karmāpi jalalakṣaṇam iti prasiddher akarmakatvāśrayaḥ kartari kta udāhṛtaḥ vṛṣto devaḥ iti /

逸脱なく特定の〈目的〉が理解される場合も、「〈行為〉は〈目的〉を持たない」という表現がなされる。例えば、*varṣati* (「それは雨を降らす」) である。

実にこの場合には、雨を降らす〈行為〉に対して、逸脱なく神という〈行為主体〉が理解されるように、雨水と特徴付けられる〈目的〉もまた理解される。したがって、[〈目的〉の] 周知性から、〈目的〉を持たないということに依拠して [動詞語根 *vṛṣ* の後に] 〈行為主体〉を表示する過去分詞接辞 *kta* が導入された語形 [*vṛṣta*] が *vṛṣto devaḥ* (「神は雨を降らせた」) というように例示される<sup>58</sup>。

<sup>58</sup>本論 2.3.1 を見よ。

[VP 3.7.88.5] yat tv aprasiddham karma tena sakarmakatvam evāsyāḥ kriyāyāḥ, rudhiraṃ varṣati śarān varṣati iti / pāṃsavo vṛṣṭāḥ iti karmaṇi ktaḥ /

しかしながら、周知されていない<目的>によっては、この<行為>はまさに<目的>を有するものとなる。

*rudhiraṃ varṣati*（「彼は血を降らす」）・*śarān varṣati*（「彼は矢を降らす」）というように。

*pāṃsavo vṛṣṭāḥ*（「埃が注がれた」）においては<目的>を表示する過去分詞接辞 *kta* が〔動詞語根 *vṛṣ* の後に導入されている。〕<sup>59</sup>

[VP 3.7.88.6] vidyamāno 'pi vā yatra karmasambandhaḥ kriyāmātrapratipādanatātparyān na vivakṣyate tatṛāpy akarmakatvaṃ sambhavati / tadyathā neha pacyate, neha bhujyate iti / kriyāpratiśedhatātparyād bhāve lakāraḥ / dīkṣito na dadāti, na pacati, na juhoti iti karmaṇo 'vivakṣā / atra kim iti nāpekṣyate / kriyāpratiśedhatātparyāt //88//

あるいは、<目的>との関係が現に存在していても、<行為>だけを理解せしめようという意図から、〔<目的>が〕表現しようと意図されない場合も、〔当該の動詞語根は〕<目的>を持たない〔動詞語根〕であり得る。

例えば、*neha pacyate*（「ここでは調理しない」）・*neha bhujyate*（「ここでは食べない」）というように。

<行為>の否定が意図されているから、*bhāva*（<行為>）を表示する *l* 接辞が導入されている。

*dīkṣito na dadāti*（「潔斎者は布施をしない、」）*na pacati*（「〔潔斎者は〕調理しない」）・*na juhoti*（「〔潔斎者は〕護摩供養をしない」）においては<目的>は表現しようと意図されない。

この場合、「何を」という期待は起こらない。<行為>の否定に意図があるからである。

[VP 3.7.89.0] tad evaṃ caturbhiḥ prakārair akarmakavyapadeśāḥ śāstre bhavanti / evam anye 'pi prakāraḥ sambhavantīty āha /

かくしてこのように、四様に、〔<目的>を有する動詞語根についても〕「<目的>を持たない〔動詞語根〕」という呼称が適用されることが文法学において見出される。他の様態も同様にあり得ることを〔バルトリハリは以下の詩節で〕述べる。

VP 3.7.89: bhedā ya ete catvāraḥ sāmānyena pradarśitāḥ /  
te nimittādibhedena bhidyante bahudhā punaḥ //

「以上、〔<目的>を有する動詞語根でありながら「<目的>をもたない動詞語根」と呼ばれる動詞語根を区別する〕四種の区別根拠を一般的に明示したが、それらは文法操作の根拠（*nimitta*）等の違いによって、さらに多様に区分される」

[VP 3.7.89.1] ya ete sakarmakāṇām api dhātūnām akarmakatvanibandhanabhūtā bhedās catvāro 'bhihitās te nimittādibhedenānekaprakārā jāyante / nimittaṃ sahāya upasargādīḥ / ādiśabdād deśakālādayaḥ /

<目的>を有する動詞語根であっても<目的>をもたない〔動詞語根〕となる。このことについての根拠である四つの区別要素がこのように述べられたが、それら〔区別要素は〕根拠等の差異によって多様なものとなる。

「根拠」（*nimitta*）とは、〔動詞語根の〕同伴者（*sahāya*）であり、*upasarga* 等である。

〔「根拠等」の〕「等」（*ādi*）から、地域・時間等〔が理解される〕。

<sup>59</sup>本論 2.3.1 を見よ。

[VP 3.7.89.2] tadyathā carati deśāntaragamanavacanaḥ sakarmako 'py ūrdhvaṣṭāntaragamaṇe 'rthāntare prayukto 'karmako nimittasya śabdāntaraprayogasya sāmāthyād bhavati / bāṣpa uccarati, dhūma uccarati iti / ucchabdavaśād dhātur ayam ūrdhvaṣṭāntaragamaṇe akarmakaḥ /

例えば、動詞語根 *car* は、別の場所への進行 (deśāntaragamaṇa) を表示するとき〈目的〉を有する動詞語根であるが、上方向への活動 (ūrdhvaṣṭāntaragamaṇe) と特徴付けられる別の意味を表示するために使用されるとき、別の言葉の使用という根拠の効力から、〈目的〉を持たない [動詞語根] となる。

*bāṣpa uccarati* (「蒸気が立ち上る」)・*dhūma uccarati* (「煙が立ち上る」) というように<sup>60</sup>。

[*upasarga* である] *ud* という語の力により、この動詞語根は上方向への活動が表示されるべきとき、〈目的〉を持たない [動詞語根] となる。

[VP 3.7.89.3] ādigrahaṇāt kvacid ātmanepadaprayogād akarmakatvābhivyaktiḥ uttapate vitapate iti / bhāsate ity arthaḥ /

「根拠等」の「等」という語の言及から以下のことが言える。

ある場合には、ātmanepada 接辞の使用から、〈目的〉を持たない [動詞語根] であることが顕示される。

*uttapate* (「それが輝く」)・*vitapate* (「それが輝く」) というように。「輝く」(bhāsate) という意味である<sup>61</sup>。

[VP 3.7.89.4] yāvadbhuktam<sup>62</sup> upatiṣṭhate, bhojanakālaṃ yāvad udīkṣate ity arthaḥ / akarmakāc ca ity ātmanepadam /

*yāvadbhuktam upatiṣṭhate* (「彼は食事がなされる限り居合わせる」)

これは、「彼は食事の時間の間近侍している」という意味である。A 1.3.26 akarmakāc ca によって、*upasarga* である *upa* に先行された動詞語根 *sthā* の後に ātmanepada 接辞が起こっている<sup>63</sup>。

[VP 3.7.89.5] sarpiṣo jānīte, madhuno jānīte iti / tenopāyena pravartata iti jñānapūrvikāyāṃ pravṛttāv atra dhātur vartate / apahnave jñāḥ ity anuvṛttau akarmakāc ca ity ātmanepadam /

*sarpiṣo jānīte* (「彼は酥乳を用いて活動する」)・*madhuno jānīte* (「彼は蜜を用いて活動する」)

これらの事例では、「それを手段として活動する」というように認識に基づく活動を動詞語根 [*jñā*] は表示している。A 1.3.44 apahnave jñāḥ から [*jñāḥ*が] 継起した A 1.3.45 akarmakāc ca に基づいて [動詞語根 *jñā* の後に] ātmanepada 接辞が起こっている<sup>64</sup>。

[VP 3.7.89.6] vākyasāmāthyāt kvacid akarmakatvābhivyaktiḥ / tadyathā nadī vahati iti / nadīlakṣaṇa-kartrviśeṣasāmāthyāt syandanavacanaṭyāyām akarmakatvam / evaṃ vāyur vahati iti /

またある場合には、文の言明効力から、〈目的〉を持たない [動詞語根] であることが顕示される。

例えば、*nadī vahati* (「川が流れる」) である。川と特徴付けられる特殊な〈行為主体〉の効力により、[動詞語根 *vah* が] 流れる〈行為〉を表示するとき、[動詞語根 *vah* は] 〈目的〉を持たない [動詞語根] となる。*vāyur vahati* (「風が吹く」) の場合も同様である。

<sup>60</sup>本論 2.1.2 を見よ。

<sup>61</sup>本論 2.1.3 を見よ。

<sup>62</sup>Iyer, Raghunātha: *bhaktam*. Kāśikāvṛtti が挙げる例に従う。

<sup>63</sup>本論 2.1.3 を見よ。

<sup>64</sup>本論 2.1.3 を見よ。

[VP 3.7.89.7] tathā karmakartṛviṣaye karmaṇaḥ kartṛtvapratīvaśād ekadeśavacanaṭyāṃ dhātor akarmakatvaṃ pacyate odanaḥ svayam eva iti /

さらに、＜目的・行為主体＞の領域では、＜目的＞が＜行為主体＞として理解されることによって、動詞語根が〔その意味の〕一部を表示する。その場合、動詞語根は＜目的＞を持たない〔動詞語根〕である。

*pacyate odanaḥ svayam eva*（「粥がまさに自ずと煮える」）というように。

[VP 3.7.89.8] evaṃ ca kṛtvākarmakavyapadeśanimittam śāstram atra viṣaye pravartate mucō 'karmakasya guṇo vā iti / mokṣate<sup>65</sup> vatsaḥ svayam eva iti /

そしてこのように考えて、「＜目的＞を持たない〔動詞語根〕」という呼称 (vyapadeśa) を根拠とする文法規則が、この〔＜目的・行為主体＞〕の領域で発効する。A 7.4.57 mucō 'karmakasya guṇo vā という文法規則である。

例文は、*mokṣate vatsaḥ svayam eva*（「子牛はまさに自ずと自由になる」）である<sup>66</sup>。

[VP 3.7.89.9] evam arthāntare vṛttir dhātor akarmakatvanibandhanaṃ nimittādibhedena bhidyate /

このように動詞語根が別の意味を表示することは、動詞語根が＜目的＞を持たない〔動詞語根〕となることの根拠であり、それは文法操作の根拠等の違いによって区別される。

[VP 3.7.89.10] dhātvarthenopasaṃgrahe 'pi nimittādibhedena bhedaḥ / tadyathā – kvacit kriyāsvarūpa-sāmarthyalakṣaṇān nimittāt tirohitabhedatve karmaṇo 'ntarbhāve 'karmakavyapadeśo jīvatyādau /

動詞語根の意味によって包含される場合にも、文法操作の根拠等の違いに基づいて区別される。例えば、ある場合には、＜行為＞の本質の効力と特徴付けられる根拠に基づき、＜目的＞の〔＜行為＞との〕差異が隠蔽され、かつ、＜目的＞が〔動詞語根の意味に〕含まれるとき、「＜目的＞を持たない〔動詞語根〕」という呼称が適用される。jīv 等の場合である。

[VP 3.7.89.11] kvacid anvākyānavyavasthayā nirdhāryamāṇarūpabhedasyāpy antarbhāvaḥ / tadyathā putrīyatau putrakarmaṇaḥ /

またある場合には、正語説明 (anvākyāna) のための区分 (vyavasthā) によって〔動詞語根の意味との〕差異が確定されるにもかかわらず、〔＜目的＞が動詞語根の意味に〕含まれる。

例えば、*putrīya-*（「自分の息子を望む」）における息子という＜目的＞である<sup>67</sup>。

[VP 3.7.89.12] paramārthato 'tra putralakṣaṇam karma kriyāsarīrānupraviṣtam bhedenāsatyena prakriyāyām anvākyānanimittam āśrīyate /

この場合、息子と特徴付けられる＜目的＞は、究極的には＜行為＞の本体に一体化しているから、非実在の差異に基づいて、派生手続き (prakriyā) において正語説明の根拠として認められる。

<sup>65</sup>Iyer: *mokṣyate*. Vt. 18 on A 3.1.87: bhūśākarmakiratisanām cānyatrātmanepadāt により、＜目的・行為主体＞の領域では、*san* で終わる動詞語根には *yak* (A 3.1.67 sāravadhātuke yak) は導入されない。

<sup>66</sup>本論 2.1.4 を見よ。

<sup>67</sup>本論 2.2.2.1 を見よ。

[VP 3.7.89.13] tathā ca vakṣyati

そしてそのような場合、[バルトリハリは次のように] 述べるであろう。

putrīyatau na putro 'sti viśeṣecchā tu tādrśī /  
vinaiva putrānugamād yā putre vyavatiṣṭhate //

「*putrīya*-においては *putra* (「息子」) [という部分] は存在しない。しかし、[実際には] *putra* [という部分] の随伴はないのにもかかわらず、息子を対象として存立するそのような特殊な欲求 [がその派生動詞語根によって表示される]」<sup>68</sup>

iti /

[VP 3.7.89.14] ācārakyaci tv atropamānakarmāntarbhūtam [/] upameyakarmaṇā tu sakarmakatvam /  
putrīyati chātram iti /

この [*putrīya*-が] A 3.1.10 upamānād ācāre が規定する *kyac* で終わる項目である場合、比喩基準である〈目的〉は [動詞語根の意味に] 含まれる。

しかし、比喩対象である〈目的〉によって [派生動詞語根 *putrīya*-は] 〈目的〉を有する [動詞語根] となる。

*putrīyati chātram* (「彼は生徒を息子のよう扱う」) というように。

[VP 3.7.89.15] muṇḍayati māṇavakam iti tu sāmānyakarmāntarbhūtam [/] viśeṣakarmanā tu sakarmakatvam /  
evaṃ miśrayati tilān ityādau /

一方、*muṇḍayati māṇavakam* (「彼は少年を剃髪する」) においては、一般的〈目的〉が [動詞語根の意味に] 含まれる。しかし、[少年という] 特殊なく目的〉によって [*muṇḍi*-は] 〈目的〉を有する [動詞語根] となる<sup>69</sup>。

*miśrayati tilān* (「彼はゴマを混ぜる」) 等における [*miśri*-等の派生動詞語根] も同様である。

[VP 3.7.89.16] bāṣpāyate, ūṣmāyate, romanthāyate ityādau viśeṣakarmanā eva nirdhāritarūpasyāntarbhāvaḥ /

*bāṣpāyate* (「彼は涙を流す」)・*ūṣmāyate* (「熱を発する」)・*romanthāyate* (「反芻する」) 等においては、[涙 (*bāṣpa*) といった] その相が確定されるまさに特殊なく目的〉が [動詞語根の意味に] 含まれる<sup>70</sup>。

[VP 3.7.89.17] paceḥ pārthivaṃ bhideś ca sāvayavaṃ karma prasiddham, na tv antarbhūtam / tasya  
svaśabdenāpi vacanāt, pacati pākyaṃ, bhinatti bhedyam iti /

動詞語根 *pac* が表示する料理〈行為〉の〈目的〉が地元素からなるものであり、動詞語根 *bhid* が表示する切断〈行為〉の〈目的〉が部分を有するものであることは周知されている。しかし、それらの〈目的〉は [動詞語根の意味に] 含まれない。そのような [〈目的〉] は、[〈行為〉に相関した〈目的〉] 自身を表示する語 (*svaśabda*) によっても表示されるからである。

*pacati pākyaṃ* (「彼は料理されるべきものを料理している」)・*bhinatti bhedyam* (「彼は切断されるべきものを切断している」) というように。

<sup>68</sup>VP 3.14.70. 本論 2.2.2.1 を見よ。

<sup>69</sup>本論 2.2.2.2 を見よ。

<sup>70</sup>本論 2.2.2.3 を見よ。

[VP 3.7.89.18] antarbhāve tu svaśabdena nirdeśo na syāt / na hi bhavati jīvati prāṇān iti / jalaṃ varṣati iti tu bhavati /

しかしながら、[<目的>が動詞語根の意味に] 含まれる場合には、[<目的>は、その<目的>] 自身を表示する語によっては表示されることはないであろう。

実に、\**jīvati prāṇān* という表現はない。

しかし、*jalaṃ varṣati*（「雨水を降らせる」）という表現は成立する。

[VP 3.7.89.19] antarbhāvāc ca karmaṇo namasyati devān ity atra namaḥśabdayoge caturthī na bhavati /

さらに、*namasyati devān*（「彼は神々に供養する」）というこの表現においては、<目的>は [*namasya-*という動詞語根の意味に] 含まれているから、*namas* という語と結びつくときに第4格接辞が起こるといふ [A 2.3.16 namaḥsvastisvāhāsavadhālaṃvaṣadyogāc ca の適用は] ない。

[VP 3.7.89.20] tathā ca vārttike

namaḥ kyaci dvitīyānupapattiḥ

iti codayitvā

prakṛtyantaravāt siddham

iti pariḥṛtam /

そしてそのような場合、Vārttikaに

「*namas* に *kyac* が後続するとき、第2格接辞で終わる項目は妥当しない」<sup>71</sup>

というように反論が提起され、

「[*namasya-*という項目は *namas* と] 異なる語基であるから、[第2格接辞で終わる項目は] 成立する」

というように難点が回避されている。

[VP 3.7.89.20] anenaivāśayena dhātvantaram eva namasyatiśabdaḥ pūjārtho na sambhavaty evātra namaḥśabdo 'vayavakalpanādvāreṇa tv evaṃ vyutpādyata ity arthaḥ /

まさにこの意図をもって次のことが意味されている。

供養 (pūjā) を意味する *namasya-* という項目は [不変化詞 *namas* とは] 別の動詞語根である。この項目において、*namas* という項目が実際にあり得るということはない。しかし、[文法学において、その項目は *namas* という] 部分の想定を通じてこのように説明される<sup>72</sup>。

<sup>71</sup>Vt. 1 on A 3.1.19.

<sup>72</sup>カイヤタは次のように説明している。Pradīpa on MBh to A 3.1.19 (III.70): namasyeti dhātuṃ vyutpādayitum nipātanamaḥśabdasaśabdāntarāvayavakalpanā kriyate / paramārthatas tu avidyamānāvayavārtho namasyaśabdaḥ pūjāvācī prakṛtyantaram ity arthaḥ /（「*namasya-*という動詞語根を説明するために、不変化詞である *namas* という語と類似した別の語が部分として想定される。しかしながら、究極的には、存在しない部分の意味を有する *namasya-*という項目は、供養を意味し、[*namas* とは] 異なる語基である。このような意味である」）

[VP 3.7.89.21] bhāṣyakāras tv anvākyānavelāyāṃ namaṣaḥ prakṛitvena pari-grahāt sambhavaṃ manya-mānaḥ punaś codayati /

nanu namasyatiśabde namaḥśabdo 'sti, tena yoge caturthī prāpnoti<sup>73</sup>

iti / pariharati ca

arthavato namaḥśabdasya grahaṇam, na ca namasyatiśabde namaḥśabdo 'rthavān

iti /

一方、Bhāṣya の作者 [パタンジャリ] は、説明の段階で、*namas* を語基として理解しているから、[*namas* という項目は *namasya*-に] 存在し得ると考えて、再び反論を提起する。

「[反論] *namasya*-という項目の中に *namas* という項目は存在する。それと結びつく場合、第4格接辞が結果する」

そして、彼はこの難点を回避する。

「[A 2.3.16 においては] 有意味な *namas* という項目が言及されている。しかし、*namasya*-という項目における *namas* という項目は有意味ではない<sup>74</sup>」

[VP 3.7.89.22] subdhātuvṛttir iyam / atra copasarjanārthaḥ pratyayārthe guṇībhūta iti namo devebhya ity atra pradhānabhūtanamaḥśabdāyoge sāvakāśatvād atra caturthī na bhavatīti bhāṣyārthaḥ /

この [*namasya*-という項目] は、名詞起源動詞語根 (subdhātu) という統合形である。そしてこの [統合形] においては、従属要素 [である語基] の意味は、接辞の意味に対して、従属するものとなるから、[一方、] *namo devebhyaḥ* (「神々に帰依」) というこの表現においては、主要素である *namas* という項目と結びつくときに [A 2.3.16 は] 適用機会を有するから、第4格接辞はこの [*namasyati devān* という] 事例においては起こらない。これが当該 Bhāṣya の意味である。

[VP 3.7.89.23] prasiddher api yatrākarmakatvaṃ / tatrāpy avāntaro bhedo deśakālavaśāj jāyate / tadyathā dakṣiṇāpathe pūrvāhṇe pacyatām ity ukte yavāgūkarmakaḥ pāko 'vagamyate / aparāhṇe punar odana-sādhanāḥ / māṃsabhūyīṣṭhe tu deśe māṃsasādhanāḥ pākāḥ prasiddhāḥ /

周知性からも〈目的〉を持たない [動詞語根] となる。その場合も、二次的な区別が地域・時間によって生じる。

例えば、*dakṣiṇāpathe pūrvāhṇe pacyatām* (「南の地域で昼前に料理せよ」) と言われたとき、ヤヴァーグー粥を〈目的〉とする料理が理解される。一方、午後の場合には米粥を〈能成者〉とする [料理が理解される]。そして、肉が豊富な地域では、肉を〈能成者〉とする料理は周知である。

[VP 3.7.89.24] kriyāsvarūpasāmarthyāt kvacit prasiddham niyatam karma, varṣati iti jalam pratīyate /

ある場合には、〈行為〉の本質の効力から〈目的〉が特定されることは周知されている。*varṣati* (「降らす」) においては雨水が [〈目的〉として] 理解される。

<sup>73</sup>MBh on A 3.1.19 (II.26.20–22): nanu ca namasyatiśabde namaḥśabdo 'sti tena yoge prāpnoti / naiṣa doṣaḥ / arthavato namaḥśabdasya grahaṇam na ca namasyatiśabde namaḥśabdo 'rthavān //

<sup>74</sup>有意味な項目は *namasya*-全体 (samudāya) である。Pradīpa on MBh to A 3.1.19 (III.70): arthavata iti / namasyaśabdasya samudāyasyaivārthavattvād iti bhāvaḥ /

[VP 3.7.89.25] kartṛśāmarthyād api karma prasiddham, yathā durjanaḥ karoti ity ukte upaghātalakṣaṇaṃ karma gamyate / sujanaḥ karoti iti tūpakāro 'vagamyate /

<行為主体>の効力からも、周知された<目的> [が理解される]。

例えば、*durjanaḥ karoti*（「悪人がなす」）と言われたとき、悪事と特徴付けられる<目的>が理解される。一方、*sujanaḥ karoti*（「善人がなす」）と言われたときには、善事が理解される。

[VP 3.7.89.26] goṣṭhībhedena deśabhedena cāparimitā prasiddhir anugantavyā, kiyad udāhriyate /

社会（goṣṭhī）の違い・地域の違いによって、[<目的>は] 数え切れないほど周知されていると理解されるべきである。例示するのも無駄である。

[VP 3.7.89.27] avivakṣāpi kvacit sādṛśyamātrapratipādanaparatayā vākyasya karmaṇo dṛśyate / tadyathā anuvadate kaṭhaḥ kalāpasya ity atra kaṭhakaḥkalāpayor bhāṣaṇasādṛśyaṃ pratipādyam iti karma na vivakṣitam /

ある場合には、表現意図の欠如も、文が単なる [<行為>の] 類似性を理解せしめることを意図していることに基づいて、<目的>について起こることが見られる。

例えば、*anuvadate kaṭhaḥ kalāpasya*（「カタ派の者はカラパ派の者にならって吟唱する」）というこの文においては、カタ派の者とカラパ派の者の間の発音の類似性が理解されるべきであるから、[祭詞（yajus）といった] <目的>は表現しようと意図されない<sup>75</sup>。

[VP 3.7.89.28] tathākarmaśaktiviśeṣapratipādana devadattaḥ kiṃ karoti iti praśne pacati bravīti iti karmasambandho na vivakṣyate /

さらに、特定の<目的>能力を理解せしめようとしないとき、*devadattaḥ kiṃ karoti*（「デーヴァダッタは何をしているのか」）という質問が起こる。このとき [返答において] *pacati*（「彼は料理している」）・*vravīti*（「彼は話しをしている」）というように<目的>との関係は表現しようと意図されない。

[VP 3.7.89.28] kriyāprabandhāvvyuparamapratipādana 'pi na vivakṣyate karma pacaty eva dadāty eva iti /

連続的<行為>の不停止を理解せしめるときにも、<目的>は表現しようと意図されない。*pacaty eva*（「いままさに料理中である」）・*dadāty eva*（「いままさに布施の最中である」）というように<sup>76</sup>。

[VP 3.7.89.29] yathāyogam anusaraṇīyaṃ prayogajātam iṣtam //89//

[以上] 適宜、望ましいあらゆる言語使用が求められるべきである。

iti bhūtīrājanayahelārājakṛtau prakīrṇaparakāśe karmādhikārah //

以上、ブーティラージャ（Bhūtīrāja）の息子ヘーラーラージャ（Helārāja）作 Prakīrṇaparakāśa（「雑録巻明解」）、<目的>論題了。

## 参考文献・略号

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*. See Cardona 1997: Appendix.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali, edited by F. Kielhorn, third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.*

<sup>75</sup>本論 2.4 を見よ。

<sup>76</sup>Prakāśa on VP 3.9.102 (84.11): ā phalasaṃpādeḥ kriyāprabandho 'vyuparato vartamānaḥ kāla ity uktam /（「結果獲得までの一連の<行為>が停止しない限り『現在時』と言われる」）



Abhyankar, Kashinath Vasudev and Ganesh Ambadas Joshi

1976 *Śrījaiminipraṇītam Mīmāṃsādarśanam . . .* Ānandāśrama Sanskrit Series 97. Pune: Ānandāśrama.

Cardona, George

1997 *Pāṇini, His Work and Its Traditions. Volume I: Background and Introduction.* 2nd ed. Delhi: Motilal Banarsidass.

KV: *Kāśīkāvṛtti*: Vāmana and Jayāditya's *Kāśīkāvṛtti*. See Miśra 1985.

MBh: Patañjali's *Vyākaranamahābhāṣya*. See (1) Vedavrata 1962–63 and (2) Abhyankar 1962–72. [References of the text of the *Mahābhāṣya* are to volumes, pages, and lines of Abhyankar 1962–72.]

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśīkāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā-Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra.* 6 vols. Ratnabharati Series 5–10. Varanasi: Ratna Publications.

NBh: Vātyāyana's *Nyāyabhāṣya*. See Taranatha/Amarendramohan.

NS: *Nyāyasūtra*. See Taranatha/Amarendramohan.

NV: Uddyotakara's *Nyāyavārttika*. See Taranatha/Amarendramohan.

Nyāsa: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra 1985.

Ogawa, Hideyo (小川 英世)

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古希記念論文集』(九州大学出版会) 533–584

2005 *Process and Language: A Study of the Mahābhāṣya ad A1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ.* Delhi: Motilal Banarsidass.

2008 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.45–54: 〈目的〉 (karman) 論序」『比較論理学研究』5: 23–44.

2009 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.55–58: 〈目的・行為主体〉 (karmakartr) 論 (1)」『比較論理学研究』6: 23–40.

2010 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.59–63: 〈目的・行為主体〉 (karmakartr) 論 (2)」『比較論理学研究』7: 7–28.

2011 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.64–66: 〈目的・行為主体〉 (karmakartr) 論 (3)」『比較論理学研究』8: 33–57.

2012 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.67–69: A 1.4.51 akathitaṃ ca (1)」『比較論理学研究』9: 31–57.

2014 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP3.7.70–79: A 1.4.51 akathitaṃ ca (2)」『比較論理学研究』11: 19–61.

2015 「Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」 (Sādhanasamuddeśa) の研究—VP 3.7.80」『比較論理学研究』12: 39–68.

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata 1962–63. [References of the text of the *Pradīpa* are to volumes and pages of Vedavrata 1962–63.]

Prakāśa: Helārāja's *Prakāśa*. See Subramania Iyer 1963, 1973.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1979 *Vākyapadīyam, Part III, vol. 2 (Bhūyodravaya, Guṇa, Dik, Sādhana, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṅkhyā, Upagraha and Liṅga Samuddeśa) with the Commentary Prakāśa by Helārāja and Ambākartrī by Pt. Raghunātha Śarmā.* Sarasvatī Bhavana Grantha-mālā 91. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Rau, Wilhelm

1977 *Bharṭṛharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen.* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Subramania Iyer, K. A.

1963 *Vākyapadīya of Bharṭṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I.* Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.

1966 *Vākyapadīya of Bharṭṛhari with the Commentaries Vṛtti and Paddhati of Vṛṣabhadeva.* Deccan College Monograph Series 32. Poona: Deccan College.

1973 *Vākyapadīya of Bharṭṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part II.* Poona: Deccan College.

Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amarendramohan Tarkatirtha

1985 *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyaṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*. 2nd ed. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Vedavrata 1962–63.

Vedavrata

1962–63 *Śrībhagavatpatañjaliviracitaṃ Vyākaraṇamahābhāṣyam (Śrīkaiyaṭakṛtapradīpena nāgojībhāṭṭakṛtena bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam)*. 5 vols. Gurukul Jhajar (Rohatak): Hairyāṇā-Sāhitya-Saṃsthānam.

VP: Bhartrhari's *Vākyapadīya*. See Rau, Subramania Iyer. [詩節番号は Rau 1977 による]

(おがわ ひでよ、広島大学 [インド哲学])

## A Study of the Sādhanasamuddeśa of the Vākyapadīya: VP 3.7.87–89

Hideyo Ogawa

With three kārīkās: VP 3.7.87–89, Bhartṛhari concludes the section on *karman* ‘object’ of the Sādhanasamuddeśa of his *Vākyapadīya* (abbr. VP). In VP 3.7.87 Bhartṛhari deals with arguments brought forward by Kātyāyana about the question of how to account for the assignment of the class name *karman*, provided for by A 1.4.49 *kartur īpsitatamaṃ karma*, to raw sugar (*guḍa*) in the utterance *guḍaṃ bhakṣayati* ‘He is eating raw sugar’. In order to account for the assignment in question, Bhartṛhari introduces the concept of *kriyāviṣayāpatti* ‘the acquisition of the status of being an object (*viṣaya*) of an action’. According to him, a kāraka which serves as object (*karman*) with respect to an action must have this status, so that such a kāraka is properly defined as a reached object (*prāpya*). Some ‘reached’ objects are of ‘effected’ type (*nirvartya*); some are of ‘affected’ type (*vikārya*); others are of neither type. In short, to be an object (*karman*) with respect to an action is to be an object (*viṣaya*) with respect to the action (*kriyāviṣaya*). The object (*viṣaya*) is that in which occurs a result brought into being by the action.

Then, it naturally from this that any verb, which denotes an action, has an object (*sakarmaka*), since any action must have its object (*viṣaya*).

In VP 3.7.88–89, Bhartṛhari classifies cases where a verb is said to have no object (*akarmaka*). There are four cases. Instances are given by Helārāja.

1. The denotation of different meanings (*arthāntaravṛtti*) by a verb  
*vah*: *nadī vahati* ‘The river flows.’ ← → *bhāraṃ vahati* ‘He is carrying a load.’  
*uc-car*: *bāṣpa uccarati* ‘Vapors are rising.’ ← → *kurūṃś carati* ‘He is going to the Kuru country.’
2. The inclusion of an object in a verb meaning (*dhātvarthasaṃgraha*)  
*jīv*: *jīvati* ‘He is living.’ = *prāṇān dhārayati* ‘He is preserving his vitality.’
3. An object being well-known (*prasiddhi*)  
*vṛṣ*: *varṣati* ‘The god—Parjanya—causes rain to fall.’ = *jalaṃ varṣati* ‘The god—Parjanya—causes rainwater to fall.’
4. Lack of intention to convey an object (*avivakṣā*)  
*anu-vad*: *anuvadate kaṭhaḥ kalāpasya* ‘The Kaṭha expert chants in the same manner as the Kalāpa expert.’ ← → *pūrvam eva yajur uditam anuvadati* ‘He repeats the chanting of the Yajus, chanted earlier.’

Bhartṛhari distinguishes between internal and external objects (*karman*) relative to a verb meaning (*dhātvartha*), accepting that the former is what is conceptually posited. We can distinguish therefore between two kinds of verbs, which may be conveniently called ‘*sakarmaka*’ and ‘*akarmaka*’ according to whether or not they have external objects to be expressed. This distinction is in effect in the domain of derivational system, which is meant for explaining actual usage. On the other hand, from a semantic point of view, an object (*karman*) kāraka is essential to an action coming about. For any action has its object (*viṣaya*).